HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	幕末西洋行と中国見聞（２・完）
Author(s)	松沢, 弘陽
Citation	北大法学論集, 43(2), 1-59
Issue Date	1992-10-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15475
Type	departmental bulletin paper
File Information	43(2)_p1-59.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

幕末西洋行と中国見聞（二・完）

松澤弘陽

目次

はじめに
Ⅰ 西力東漸のあとをたどる（以上第三八巻第五・六合併号）
Ⅱ ヨーロッパの中の中国
Ⅲ 世界像の転換と中国像の転換（以下本号）
Ⅳ むすびにかえて

Ⅱ　ヨーロッパの中の中国

一路西に向う日本人の一行が港々で働く中国人の労働者や商人の姿を目にするのは、アレキサンドリアが最後である。地中海航路の客船ではもはや中国人船客の姿を見ることもない。マルセーユかサウサンプトンで上陸すれば、そこは中国を浸食して来た西洋列強の本国である。しかしそこでも彼らは、各地で、中国の文物・兵器、中国についての情報、さらに中国人にまで、予期せぬ出あいを重ねることになった。そのあとをたどってみよう。

1．第二帝政下のパリにて

ヨーロッパ本国を訪れた日本人たちが驚いたものの一つは、大きな発達をとげた各国の新聞である。彼らは、上海や香港で在留宣教師らが発行する新聞について早くから知っており、念願の現地で、その発行を見聞する機会にめぐまれた。しかしながら、それらは條約港や植民地に寄留する西洋人の小社会の新聞にすぎなかった。それに比して各本国での新聞は、伝える情報の量でも伝達の早さでも日本人訪問者たちの想像を絶するものだった。そこには、中国や日本を含む世界中の情報が集められ、本国を中心とする立場から編集され解釈されていた。

「東洋の新聞は米国桑方斯哥（サンフランシスコ）印度新嘉埠（シンガポール）の電線にて不日に達するを得せしむれば本邦又は支那印度の瑣末なる珍事までも都て如斯迅速に其詳なるを得る看る人其気息の快通するを察すべし」[1]

そのような新聞に導かれた「パブリックオピニオン」は国内政治のみでなく、アジア諸国への対外政策をも左右するだけの力を揮っていた。したがって日本人使節も留学生も、言語の壁にもかかわらず新聞の東アジア情報に、大きな関心を払った。一八六二（文久二）年の幕府使節団は、ロンドンで、早速むこう一年の新聞の購読を予約したし[2]、一八六

四（文久四・元治二）年の幕府遣仏使節団は、帰国報告として、「西洋諸洲新聞紙社中に御加入相成彼我之事情相通し候様仕度儀」[3]を上申するにいたった。

このような日本人たちは、西欧各国の新聞に現われた東アジア認識、とくに日本と他のアジア諸国との比較評価にきわめて敏感になった。たとえば、一八六七年のパリ万国博に派遣された幕臣渋沢栄一は、その日記に、各国の展示を比較評価するパリの新聞記事から、次の一節で始まる長文を訳させ記録している。

「博覧会中亜細亜弗利加諸国の部を巡行せば。竟に誇詡の私意を生せざる能はずかかる遠距の国々まで此の会に列することは是この国の声誉なるべし全亜細亜中にありて最全備し最華盛なる産物は無論これを日本に帰す」[4]

パリの万国博については、後にふれるが、この短かい一節からも、ナポレオン三世の万国博を支えた、アジア・アフリカに君臨するフランスの「誇詡」と、そのフランスから高い評価を受けたことに喜ぶ、日本人の反応が読みとれるだろう。

日本人に、こうしたフランスの新聞に接し、そこから中国・日本情勢を知ることを可能にしたのは、実は主として、日本に関心を持つフランス人を通じてだった。フランスの東アジアへの知的関心は、元来、中国へのカトリシズムの宣教、さらに啓蒙思想の中国讃美と結びついて発展し、そのような背景のもとに、一九世紀に入って、ヨーロッパ諸国の先頭を切って中国の学問的研究が始められた。一九世紀半ばになってこのフランス中国学の伝統という母胎の中からようやく日本への学問的関心が生れようとしていた。そのような中国学からの日本学の誕生という学問のささやかな新しい動きを象徴していたのが、コレージュ・ド・フランスで中国学の巨匠スタニラス・ジュリアンに学び、この頃日本語のわかる中国学者として知られるようになった、「一個ノ奇書生」（栗本鋤雪）レオン・ド・ロニだった。彼はまたこの頃指導的な新聞『ル・タン』の編集陣にも加わっていた。ロニは「日本朋友」を自任して多くの日本人につきまとい、

フランス文明への手引を買って出るとともに、当の日本人が知らぬうちに彼らを人類学研究の生ける資料として利用した。日本人たちは、ロニから、フランスの目で見た中国情勢と、それに対するフランスの政策についても教えられたのである。[5] たとえば、一八六二年幕府遣欧使節団の首席随員がパリから送った書簡は、ロニが翻訳したフランスの新聞記事数篇を集めた上、「佛人羅尼の話」をいくつか報じており、その一つには次のようにある。

「支那にて長毛の賊如何なる故にや佛のアトミラールを殺せるを以て佛帝波利稔（ナポレオン）大に怒り交趾等に備し兵船を悉く寧波に送り終に其地に占據して長毛賊を攻る故に今長毛賊使節を送り其罪を謝し條約を結ば、則長毛は支那の一王となるへし又寧波には現に佛兵據ると雖長毛是を不問に置く時は寧波は自ら佛の所有となるへし」[6]

ロニの話が正しく理解されなかったのだろうか、この文章の後半は事実からいちじるしく離れており、ロニが語ったもとのことばを想像することも難かしい。しかし、その前半が指していることがらは、明らかである。一八六一年末、太平天国軍は寧波を占領し、西洋諸国に対して開かれた條約港をはじめて支配下におさめた。これを機に現地の英・仏両国軍は、それまでの太平天国軍に対する不介入の建前を捨て、正規軍による軍事干渉にふみ切った。この文章の前半は、英・仏両国軍の太平天国に対する政策の決定的転換を語っているのである。ただ、この話は、決定的な出来事を、フランスに都合のよい角度から描いて事実をまげている。事実は、英・仏両国軍艦の寧波奪還作戦が先であり、フランス艦隊司令官A・プロテの戦死はその結果だった。ロニの話は、それを逆にしており、太平天国軍の條約港占領が中国貿易にもたらす損失をおそれるフランスのおもわくなどにはふれていないのである。[7]

フランスは、中国とこのような長い文化的交渉の歴史を有し、またすでに貿易を始めていたからだろう、パリには日本人訪問者より先に住みついている中国人がいた。これら日本人の中にはこうした中国人に偶然出あって、筆談をかわす者もいた。[8]

このような個人や新聞からえられる情報とならんで、中国に進出しつつあるフランス帝国の首都パリという場において、日本人に中国の歴史と現況を示したのは、さまざまなコレクションと展示の中の中国文明の産物だった。一八世紀中葉は、近代の博物館や博覧会の形成・発展史における大きな飛躍の時期だった。近代博物館の母胎となったのは王侯貴族や富豪が、権力や財力によって獲得した高価な珍品奇種のコレクションであり、それは長い間、私的なコレクションとして秘蔵されて来た。これが一九世紀に入って民衆教育の目的をもった、公開の公共博物館という新しい形に変容を始めたのである。これは、訪れた日本人に「下民ヲシテ共ニ遊楽ヲ得セシメ又博物ノ識ヲマス等稗益アラシムル為ニ設ル所ナルヘシ」[9]という強い印象を与えたのである。またこれとほぼ時期を同じくして、さまざまな民衆娯楽としての見せ物が、産業革命を経た新しい文明の最先端の産物を大規模かつ組織的に誇示する博覧会へと発展した。その頂点が一八五一年に始まる万国博覧会だった。

パリを訪れた日本人一行の中でこのような豪商や商人の、中国を含むアジア諸国の文物の蒐集に接する機会が最も多かったのは一八六四年の池田使節団だった。たとえば、彼らがパリ市内を散歩していると、フランス婦人に日本語で呼びとめられた。彼女に伴われてその店にゆくと、横浜滞在二年という商人の夫妻であり、「店中所有ノ貨物皆我朝ト支那トノ器械」だった[10]。

しかし、公式使節として西洋に派遣されたグループの場合には、交渉や表敬訪問以外の時間に、まっ先に案内されたのは、王室や政府のコレクションであり列品館だった。フランス訪問の場合には、フランス側接伴員に伴われて、パリ郊外フォンテンブローの離宮を訪れると、「秦始皇帝ト雖カカル奢侈ヲ極ルハ恐クナカルヘシ」[11]と驚くほどの荘麗な宮殿の一角には「支那ノ百貨ヲ列ネタル所」[12]が設けられていた。それはおそらくルイ一四世以後、宮庭と貴族の間にひろがった中国趣味（シノワズリ）の粋を集めたものだったろう[13]。だが、フォンテンブロー宮殿で一八世紀フランスの中国文明讃美の結実

を見た同じ人々は、日を接して、一九世紀後半のフランスと中国との間の、それとは全く異なるタイプの交渉の結果にも直面した。壮大な「戎器観場」[14]――兵器陳列館――に案内された人々は、世界各国古来の武器の発展に接して、「実ニ諸器械ノ沿革ヲ見テ宇内ノ形勢歳月ナルヲ知ルヘシ」[15]という印象を刻みつけられた。中でも日本人武士の心をとらえたのは、陳列品の多くがヨーロッパ以外の地への外征でえられた「戦捷分捕之戎器」[16]であることだった。何よりも衝撃的だったのは、咸豊帝の錦衣や懐剣をはじめとする中国からの多種大量の高貴な品々だった。これらは、一八六〇年のアロウ戦争に際し、天津・北京にわたる悪名高い大掠奪の獲物だった。一行の一人は、咸豊帝の金龍の錦衣につけられた玉の札に「天子不庭ヲ征シ懐柔ヲ主ト為ス」[17]という趣旨のことばが刻まれている事実を見逃さず、記録している。

中国の文物との同じような衝撃的な出会いは、造幣局訪問の際にも待っていた。附属の「古器珍宝」の展示を巡観して、「開祖ナポレオン」所持の品物に、「雄威八紘に震ひ、偉略千載に輝く当時の風采」[18]をしのんだ後に出あったのは、中国で掠奪した品々だった。

> 「支那物展観の所にいたる、夫子の金像冉求の神位あり、是道光年中北京の役仏兵聖廟に拠りしと聞り、其際持帰りしものなるへく思はる、豈料ん百代必祀の聖像、万里外他邦の石室に納て、戦勝の景観不朽に伝えんとは、庸臣誤国失挙大敗、竟に此慨嘆を発さしむ」[19]

宮庭も聖廟もともにフランス軍に蹂躙され、皇帝の錦衣も孔子の聖像もパリで衆人の目にさらされている。この事実は中国政治の現状についての強烈な印象を刻みつけたようである。

一八六〇年代を通じる日本から西欧への使節団は、一八五一年に始まる万国博覧会と深い交渉をもっていた。後に述べるように、一八六二（文久二）年の幕府遣欧使節団は、この年のロンドン万博の開会式に引き出されることになった。一八六七年のパリ万博は初めて日本の公式参加を受け入れ、同時にそれは、幕府・薩摩藩・肥前藩の角逐の場となった。

それゆえに、幕府使節の半公式記録には、フランス第二帝政の総力を動員し国家的事業として組織されたこの万博の意図と特質とを刻明に記録している。「万国の産業の成果の大博覧会」(The Great Exibition of the Works of Industries of All Nation)を正式名称に持つ万博は、産業革命がきり開いた新しい世界の姿を、世界中に示そうとした。その世界はしかし、英・仏対抗を軸とした権力政治の世界であり、新しいテクノロジーによる西欧各国の対抗と、非西欧世界の制覇競争の世界だった[20]。各種産業製品の展示から見世物にいたるまで、国威発揚を意図する強烈なナショナリズムによって裏打ちされていた。この記述は

「各国品物の異を観ば自ら其国の風俗其人の智愚も思ひやられ殊に東洋西洋風気俗尚の懸隔せる凡器用服色の上に就ても略々其一端を概見すべし」[21]

と記した上、出品した各国に割当てられた展示面積について詳細に報告している。それによればフランス二分の一、英国六分の一、以下等比級数的に米国、オランダ等は三二分の一、日本、中国、シャムあわせて一二八分の一の比だという。ここには、第二帝政のフランスの立場から見た世界諸国民に対するランクづけが、見事なまでに視覚化されているといえよう。この報告は、このような世界像を、疑をさしはさむことなく受け入れていた。それはさらにそのような枠組を前提とした上で、日・中・シャム三国の枠の中で、「我物産の多く出でしにより遂に其半餘を有つに至れり」[22]と記すのを忘れなかった。

2．ロンドンにて

幕末の日本人にとって、西洋本国における中国との出会いの場として、パリに比肩しおそらくそれにまさっていたのはロンドンだった。それは、一九世紀後半における英国が、中国政策、中国伝道においても、それらと結びついた中国

研究においても、フランスを引き離すにいたっていた事を反映していた。

前編でのべたように、幕末の日本人は、香港や上海に発展しつつある英国宣教師の中国研究を含む出版物を熱心に求めた。彼らはさらに、そのような英国の在華租借地や植民地の出版文化の背後にある英本国の出版活動にも、かねて強い関心をいだいていた。一八六二（文久二）年の幕府遣欧使節団の場合を見よう。この一行がロンドンに着いた時、その中の洋学派知識分子がまず探したのは、上海や香港で手に入れることが出来なかった、ロンドン宣教会の宣教師W・H・メドハーストの英中辞典 *English and Chinese Dictionaly*, 2vols, Shanghai, 1847. だった。その一人福沢はこの辞典が五ポンドという彼らにとっては大変な価格だったことを、覚悟の上とはいいながら辛かったような口ぶりで上包に記した。彼らは英国製の珍貴な品物を土産に漁る同僚の「玩物」をよそに、互に相談して帰国後の学習のためにビクトリア期に発達した各種の事典類、初等教育・民衆教育の標準的な教科書類――特に世界地理、歴史についてのそれ――を精力的に買い調えた[23]。云うまでもなく、それらは、英国を中心とした世界像を示しており、その中には、英国の視座から見た中国・日本やアジアの姿が、日本人たちの知る以上に詳しく記されていた。これらは、後述するように、彼ら洋学系知識人の世界認識と著作活動に大きな影響を及ぼすことになるのである。

ロンドンを訪れた日本人が、このようにメドハーストの辞典を入手することが出来たのには、実は彼らより早くからロンドンに学んでいた一中国知識人の助けが大きかった。故国への手紙を引けば、「厳嘱（ママ）有之英華字書は香港にて難得候に付英国到着直様点検致し候処幸一個の唐人に会し漸三部見出し……」[24]。一行の別なメンバーの手記によれば「龍動府一漢人唐学塤在焉学塤字伯友浙江金華府人也鄰邦情厚日夜往来于吾館中筆語」[25]。同じ人物の書簡にはこの人は「清国学校教官唐伯水弟……深志有て英国に住む事三十年右の人物は頗る懇意ニ有成日々往来……先ニ出會致候羅森より好人物にて面白御座候」[26]とのべられていた。同じ洋学者グループの福沢諭吉は、これまで中国人と交わることにむしろ消極

的だったが、その福沢もこの人に対してはめずらしく積極的だった。親しい大槻磐渓に托された七言絶句の作を記した扇子をこの中国人に渡し、礼状をもらって磐渓に送っていた[27]。福沢もこの人とは「極懇意」になったと語っているが、その手記への記入によれば唐学塤は、「三年前より英語を学び且事情を探索する為め龍動に来れり。……欧羅巴遊学中は衣服冠履皆欧羅巴の俗に変じ、学校に入り或は別に師を求めて学べり。龍動在留中一年の学資二百ポンド、故郷の父兄より之を送ると云[28]」とあり、使節団一行がロンドンを去って二月半後、パリに立寄った時には「今又仏蘭西語を学ぶ為め巴理に来り尚一ケ年比に留るべしと云[29]」という次第だった。日本から西欧への最初の使節よりも早く、「深志有て」政府とはかかわりない一私人として英国に渡り、英国社会にとけこんでいる一中国人の様子が、またこの人の単身西洋遊学を支えている家族がかなり裕福な家であるらしいことが、うかがわれよう。

日本人たちは、ロンドン・パリ両都にわたる、この中国人との頻繁な交わりの中で、中国の物産や、太平天国の反乱から同治中興にかけての中国政治の現状までにわたって多くのことを聞き出した。これも福沢のノートへの記入によれば、

「方今支那帝少幼なれども帝の叔父恭親王叱囉呢政を摂し外國との交際甚だ好し。二、三ケ月前より英佛の助を借て長髪賊を攻、屢〻克。又英人ワルドなる者を用ひ將軍の官を與へ兵卒八千人を数えしむ。○漢口の商人銀六萬員を米利幹え送り新發明の鐵船モニトルを買ふ者あり[30]」。

ロンドン遊学三年の中国人が、故国の事情によく通じており、福沢が、この人を通じて同治中興・恭親王政権の成立から、米人ウォードによる常勝軍の組織、英・仏両国の清朝政府への加担と太平天国への軍事干渉という政策の転換など、中国政治の重要な局面転回についての最新情報を聞き出したのである。しかし、これとともに、あるいはそれ以上に重要なのは、彼らより早く英国に渡っていた中国知識人と親しく交わってその力をかりながら、西欧理解の可能性の点で、

中国への対抗意識が現われていたらしいことだった。福沢諭吉は晩年にいたるまで、この時の唐学塤と交した談話を、彼の重要な立論の根拠として繰返し引照することになるが、その一つを引こう。

「千八百六十二年、福沢先生が英京倫敦に滞在中、支那の遊學生某氏と邂逅、會談數次、談は多く教育論にして、某氏の曰く、東洋の革新を謀るにはお互に西洋文明の教育を輸入するより先きなるはなし、今、日本にて自から洋書を讀で其意味を解し又これを他人に教へ得るものは幾人ありやとの言に、先生答て曰く、精密の數を擧ぐるは難けれども、余の勘定にては日本國中にて慥に五百人はある可しと答へて、扨支那にては如何と問返したるに、彼れは指を屈しながら嘆息して、赤面ながら僅に十一人に過ぎずと答へたり。先生その言を聞て竊に謂らく、當時日本は開國匆々尚ほ十年に滿たざれども、……江戸の開成所を始めとして其他の私塾も乏しからず、就中大阪緒方の塾の如き、國中の一大洋學塾にして、其筋々に就て計ふれば五百人の數は慥なる其五百人は如何なる種類の人なりやと云ふに、當時日本にて洋書を讀むものは大抵醫者の輩なりしかども、……封建守舊の世の中に社會の風潮に反對して洋學に志す程のものなれば、何れ[ママ]一癖ある大膽の人物にして、見識自ら一世を壓して氣焰當る可らず、五百人の數、多からずと雖も、自から同士の輩も少なからざる其上に、學問知識は國中の精粋を拔て陰然重きを成したる其反對に、支那の有様を見れば開國以來殆んど百有余年、其間既に二回も外國と戰ひ、和戰共に外人に接して西洋文明の事物を實見しながら、人民の智識は如何と云ふに、外國との取引に從事し又は外國船などに乘組む下等の人民中には洋語を語るものその數を知らず、彼のピジョン・イングリッシュとして一種の洋語さへ流行する程の次第なれども、彼等の洋語は單に商賣上の必要より覺え得たる者にして、例へば茶を賣るが爲めに茶の字を知り、茶を賣て代金を請取るが爲に金の字を知る等、只目前の用を辨ずるのみにして、其以上に至り西洋の地理歷史を解するが如き、決して望む可らず、現に開國百年の當時に眞實洋書を讀み其意味に通ずるものとては、全國何億の人口中僅々十一人に過ぎずと云ふ、我國と相對するときは比較[31]の限りに非ず、斯る有様にては到底進歩の見込ある可らずとて、某氏の談話を聞きたる當時より既に望を絶ちたりしと云ふ」

福沢はここから、中国においては西洋文明は、「上流士太夫」には容易に受け容れられず、「偶ま西洋人を知り西洋語を語る者は社会最下等の小民にして其勢力固より上流に及ぶ可からず[32]」。それに対して、日本では西洋文明は「其端を国

中の最上等の人傑に発したるこそ幸なれ」[33]という、構造的対比を描き出す。このような西洋文明受容における日中両国の対比は、問題の一面を鮮かに浮かび上らせているが、同時に他のある面を見落す。そしてこうした見落しは、西洋行を共にした日本人たちの中で、福沢たち洋学派知識人に特徴的な中国への接近とおそらく関係していたのである。

日本人一行と英国の中国研究との交渉は書物や辞典の購入という形のそれにとどまらなかった。一八六二（文久二）年の遣欧使節団がロンドンでホテルに滞在した時見出したのは、各室の机上に置かれた中国語訳の新約聖書だった。これはおそらく英国のアジア宣教団体からの攻勢だったのだろう。一行の一人は「是書便西洋宗教の書也…其黠知ナル最可悪厭ヘシ」[34]という反撥を記している。さらに、この時期に西欧の中国研究の先頭を切っていた英国のそれには、聖書の中国語訳に代表される宣教団体の中国研究とならんで、広東に拠点を設けた東インド会社で発展した実務的中国研究の流れがあった。ロンドンを訪れた日本人は、このような中国研究・中国政策の中心人物と交わるまでにいたった。前編で述べたように、幕府最初の遣英留学生団の監督として一八六七（慶応三）年から六八年にかけてロンドンに滞在した聖堂御儒者、中村敬宇は、最高のミッショナリ・シノローグ―ジェームス・レッグ（理雅各）―の儒教経典の英訳をロンドンに携えて来ていた[35]。その敬宇はロンドン滞在中に英国の外交官的実務的中国研究を大成したジョン・デーヴィスに出会った。デーヴィスは一八一三年から三五年まで、広東の東インド会社根拠地で勤務して中国研究を重ね、一八四四年には第二代の英国公使兼香港総督となったが、強圧的な中国政策を行ったために翌年辞任を余儀なくされた、外交・貿易と研究の双方において、中国との接衝の第一人者だった。中村敬宇はデーヴィスと親しく交わって、彼の中国論や中国の書物の英訳を贈られ、帰国後その一つ *Chinese Moral Maxims*, 1823 を『英譯漢語』として翻訳刊行するまでにいたった[36]。敬宇のこの仕事から、真摯な儒者として、終生中国文化への尊敬と日中の友好を主張した彼が、中国文化の理解において、デーヴィスから影響を受けるか、あるいは共鳴した様子がうかがわれるのである。

一八六二年のロンドン万国博の開会式には、ちょうどロンドンに着いた幕府の遣欧使節団一行が、生ける展示物よろしくの形で招待された。この万国博にはすでに日本産品とならんで中国からの伝統工芸も出品されており、一行は、英国最新の科学技術を中心とした世界諸国諸民族からの文物の配列の中で、それらが占める位置を明らかに示された[37]。また、ロンドンを訪れた日本人はほとんど例外なく大英博物館をたずねた。この世界最初の公共博物館兼公共図書館でも、彼らは、アジア諸国の文物に出会った。インド・中国の書画を集めた一室にはすでに太平天国庚申（一八六〇年）太平天国四年に于王洪仁玕が著し、翌一八六一年に公布された「誅妖檄文」まで収められていた[38]。さらに、このような公共の展示だけではなく、民間の見せ物というべきマダム・タッソーの蝋人形館にも当代中国の人物が姿を現わしていた。日本にもその英名が知られて久しい、ピョートル大帝、ワシントン、ナポレオン、ビスマークらの像を眼のあたりにした人は「一室ノ中ニ古今ノ英雄ニ対スル事実ニ平生ノ宿志ヲ解クニ似タリ[39]」という感動にうたれた。しかも彼はその間にまじった「林則徐先生夫婦ノ像及ヒ支那商人[40]」に出会った。

「前に洋船ノ鴉片煙ヲ携ヘ廣東ノ閒ニ逼リ交易ヲ促セリ。此時林則徐先生確然一定ノ志ヲ以テ洋夷ノ猖獗親和スベカラザルヲ洞見シ、攘夷ノ議ヲ建テ大ニ兵ヲ起シ、齎（モタラ）シ來ル處ノ鴉片煙數萬箱ヲ焼滅シ大ニ英佛ト戰ヒ、屢洋船ヲ砕キ土氣大ニ振興セリ。然トモ時運未タ至ラス、英再ヒ大擧シ來リ、滿朝一人モ先生ノ志ヲ繼ク者ナキヲ以テ百敗竟ニ洋人ノ爲ニ呑剝セラル。今日先生ノ像ヲ拜シ其威儀ノ漂然タルヲ見ル。英人ノ此像ヲ茲ニ出セルモ其正義純粋ナルニ服セシナラン可欣[41]」（傍点引用者、以下同様）

この一行は、いわば英国人にとっての「古今ノ英雄」パンテオンの中に林則徐が加えられているという事実に接して、林則徐への敬仰の念を新たにするとともに、その事実を通して、英国人も「正義純粋」という同じ価値を受け容れるの

だという見方に変ったのである。

しかし、西洋を訪れる日本人の多くに共通する関心は、何といっても西洋の軍事技術だった。パリにおけると同じく、ロンドンでも彼らは政府管轄のさまざまな武器展示館をたずね、この場合も行く先々で世界の新旧の武器の中にたちまじって中国製武器が展示されているのに接した。その一つはロンドン塔附属の武器庫である。純然たる観光のつもりでロンドン塔を訪れた者も、武器庫に案内され「古昔ノ武器ヲ救（ママ）[42]」め「印度、亜比利加、支那、日本ノ武器ニ及」んでいるのに接した。それらは、いずれも「分捕」だった。ロンドンを訪問する日本人の多くの最大関心事だった、ウーリッジの兵器廠でも同様だった。彼らのお目あては、最新鋭のアームストロング砲だった。そして、アームストロング砲製造に驚いた者の中には、所属の武器陳列館で、中国の火器に接して、別な驚きを重ねる者もいた。

「此處印度、支那ノ大砲ヲ各處ニ展観シタリ。前年英船印度、支那ヲ攻撃シ奪ヒ取リシナリ。余之ヲ見テ冷汗背ニ透ル[43]。」

一八六二年の幕府遣欧使節団の一員渕辺徳蔵が、ロンドンを去ってオランダに向う日に詠じた詩「遙かに一隅を去って一隅に来り、爲に萬苦を侵すも又娯多し、車は鉄路を奔りて鷹隼に優り、信送の電機は僕奴を省く、……何ぞ量らん僻境斯くの如くに富み、中華も胡の為に及ばざるを[44]」（原漢文）は、以上にのべたようなさまざまな経験の最大公約数といえよう。それは、古い中華的世界像の辺境――実は西欧産業世界の中心――を訪れた日本人たちの世界像が転換し、その中で「胡」と「中華」が所を変え始めていることを象徴していた。

3．オランダで

鎖国の時代を通じて、西欧諸国の中唯一日本と通商関係を維持し日本の開国を手引きしたオランダも、一九世紀後半には、国際社会における位置は低下していた。日本がわでもそのことを知っていた。したがって日本からオランダに送

られた留学生も、一八六二（文久二）年から一八六六（慶応四）年にわたる幕府留学生の他には、多くなかったし、外交使節団も、一八六二年の遣欧使節団のほかにはオランダを訪れていない。それでも、オランダの東アジアとの長い通商の歴史を背景として、ライデンの博物館を始め各地に日本・中国の文物が集められていた。一八六二年の遣欧使節団のメンバーの手記には、短かいオランダ滞在中にアムステルダムの博物館[45]、アムステルダムの商店[46]やハーグの豪商のコレクション[47]を訪れて、日本のそれとともに中国の伝統工芸品に接したことを記している。

4．サンクト・ペテルブルグにて

一八六〇―七〇年代を通じ、ヨーロッパ諸国の中で、英・仏両国についで中国との関係が深いのはロシア帝国だった。けれども首都サンクト・ペテルブルグを訪れた日本人グループは、日露両国の国境画定交渉を課題とした一八六二年の幕府遣欧使節団、一八六七（慶応三）年の小出大和守一行のほかには、一八六五（慶応元）年から六八年にかけての不幸な結果に終った幕府留学生団のほか、ほとんどいない。それでも、記録が乏しい後二者は別として一八六二年使節団の記録からは、ヨーロッパ最北の首都でも、中国の姿に接した様子がうかがえる。一八六二年の竹内使節団の交渉相手となったのは、ロシア外務省アジア局長ニコライ・パヴロヴィッチ・イグナチェフだった。随員渕辺徳蔵は日記にこの「亜細亜管領」の中国での働らきについて次のように記している。

「此人先年北京に到りて満州經界のことを論すれとも不決して滞留せし中英佛より北京を襲ひて既に都下ニ亂入し支那帝も都を立退き都下放火せし時支那帝ニ書を贈りて此難を解き英佛と和せしむることを己に任する時は速に成るへしされども満洲經界のこと曽て談せし如く許すにあらざれバ行ひ難し、和を任するや經界を許すや何れにも答を成すへしといえり其時支那帝窮迫せし事なれハ經界の事ハいふか如くに許すへし英佛え和議々然るへく頼むと云ひしにより英佛公使に自ら説きて遂

に兩國和解せしめ其代りに黒龍江南八百里の地を魯國の版圖に入れたり是に因て英國女皇よりは自筆の謝書を送り佛国よりハ金のメタイム（貴表）を贈りたり支那よりも莫大の謝儀を送りしに却て受けす其代りに魯國の界まで國帝自から送るへしと乞ひしニ遂ニ望の如く界まで咸豊帝は送りしとなり」[48]

ここに記されているところは、シベリア・満州の国境画定交渉のために派遣されてから、翌六〇年一一月に帰国の途につくまで、アロウ戦争と英仏連合軍の北京進攻・大掠奪という咸豊帝統治末期の政治的危機の渦中での、北京を舞台にしたイグナチエフの辣腕と成功であり、大すじで正確にとらえられている。彼は咸豊帝蒙塵、連合軍の北京進入という危機の中でほとんど交渉能力を失いかけていた清朝政府の弱味につけこんで英仏側との交渉を斡旋し、その見返りに、長年ねらっていて果たせなかったウスリー川右岸の広大な地域を、一兵も動かさずに一挙に獲得したのだった。しかし、熱河に蒙塵している咸豊帝を国境まで見送らせたという事実ではないくだりを始めとして、この話もイグナチエフがわの成功を誇大に、清朝がわの不名誉を過大に、色どっていることは明らかである。

一行はさらに、三か月前に北京を出発して陸路帰国し、ペテルブルグに着いたばかりという医師に会い、中国の最新情報を聞き出している。福沢諭吉は、その日誌に次のように記した。

「現今支那の景況、同治帝年七歳、恭親王政を攝し、政治甚だ好し。二太后あり。此亦國政を参り聴く。凡百日前長髪賊佛蘭西の水師提督を殺せり。此より佛英の兵共に北京を助け長髪賊を攻め未だ勝敗なしと云」[49]

咸豊帝没後の幼帝同治帝を中心にした東太后および西太后の垂廉政治、恭親王の政権中枢掌握という新しい体制のすべり出しをよくとらえている。後半は、同治の新政権成立の後、太平天国軍の條約港寧波占領を機に、英仏両軍が清朝に加担する軍事干渉にふみ切る、という決定的な転面を伝えている。このニュースは、すでにパリでも聞いた所だったが（四頁参照）、ペテルブルグにおいても、この干渉政策は、英仏両国の国家利益からではなく太平天国軍の非道に対

する報復だという、英仏本位の解釈がされているのが特徴的である。同行の翻訳官松木弘安も故国の同学への手紙に、同じロシア人医師から聞いた英仏軍の太平天国軍攻撃の情報を記した上、「新聞紙の合戦する支那地名多けれ共支那譯字を知らされは不載于此[50]」と記していた。新聞は詳しく報道しているが、中国の地名のヨーロッパ語（ロシア語か？）表記がわからないというのだろう。ペテルブルグの新聞も中国の最新情報を伝えていたのだった。

日本人一行は、このように中国の動乱の渦中から帰国したばかりのロシア外交官・商人や新聞を通じて、同時代の中国政治についての最新情報に接しただけでなく、帝政ロシアに一世紀余りにわたって蓄積されて来た中国の文物と中国研究の資料とにも接するにいたった。その一つは「チャスコエセル部の春宮[51]」、ツァールスコセロの離宮である。一行が拝観を許された豪華な宮殿の装飾に「唐美人の華燈を捧たる人形ありて其風彩は真に逼るといふへし[52]」と驚いた人は、さらに「唐制に模たる宮[53]」に出会う。

「皆唐山の物産にて造りたり其内に山水人物の扁額二箇あり上に御製の詩二首あり下に臣干中敏敬書とあり筆法整正書跡精妙なり[54]」

これはエカチェリナ二世のもとで作られた中国風パヴィリオンだろう。フランスにあこがれ啓蒙思想に心を寄せたエカチェリナ二世は、フランスから啓蒙専制の思想とともに、中国趣味（シノワズリ）を受け入れた。一八世紀におけるフランス経由の中国文物の流入を象徴するのがこのパヴィリオンだったのである。

中国の文物は、郊外の帝室離宮よりさらに身近な首都中心の、一般に公開された博物館にも集められていた。その一室について次のように描かれている。

「漢籍數万帙あり四書五経十三経注疎十七史二十一史劄記史記漢書三国史晉書南史北史唐書新唐書宋史金史元明史太[太]史及ヒ塩鉄論論衡老子荘子孔子呉子尉繚史司馬法荀子文中子類其他總集別集等は枚挙に暇あらす[55]」

この博物館はおそらくサンクト・ペテルブルグ最初の博物館として設けられたクンストカマー(Kunstkammer)だろう。そして経史子集の全てにわたり、古典から清朝政府公刊の地誌にいたるまでの膨大な典籍のコレクションは、正教北京伝道団の中国研究の成果だったのではなかろうか。一七一六年から始まった北京伝道団は、特に清朝のイエズス会宣教師追放以後ヨーロッパと中国との文化接触の重要な窓口となり、その中国研究は、一九世紀に入ってヨーロッパ有数のものに発展した。ロシア外務省に新設されたアジア局による対中国政策もペテルブルグ大学を始めとする各大学での中国語・中国研究も北京伝道団の資料収集と研究の基礎の上に展開されたのだった[56]。

日本人訪問者たちが、ヨーロッパ諸国の本国において、多くの場合予期せずして出あった中国のモノと情報は、多様であり、ヨーロッパ社会に広くゆきわたっていた。それは、伝道団、さらに貿易商・外交官・軍隊などを通しておそくとも一七世紀からこの時代まで、二世紀以上にわたってヨーロッパの中心にもたらされ蓄積されたものだった。それは、一八世紀には讃美の対象だった。乾隆帝が円明園に西洋館を作ったのと同じ時期に、ルイ一四世は円明園のフランス版を王宮に築いた。フランスに始まった中国趣味（シノワズリ）の建築や造園は、ヨーロッパ各地に及んだ。それらは一九世紀には、商品として、やがて軍事的遠征の略奪品としてヨーロッパにもたらされ各地に流れた。このような美術工芸品、典籍から武具・鉄砲にいたるまでのさまざまな中国のモノは、はじめは王侯貴族や富豪の私的蒐集として秘蔵された。しかし一九世紀を通じて公共博物館・図書館が発達すると、中国からもたらされたモノは、そのような公開の場に陳列されて広く公衆の目にふれるようになった。また、かつて中国についての情報は、宣教師や啓蒙思想家によって書物にまとめられ、知的エリートの間でもてはやされたが、一九世紀にはようやく中国学や人類学がはじめられ、また中国からの電信による報道も伝えられるようになっ

た。それらによる情報は学術書ばかりでなく、新聞雑誌や量産の民衆啓蒙書や地理・歴史の教科書の形でも広く流布するようになった。

ヨーロッパ諸国を訪問した日本人たちが、公式使節として王室の中国文物蒐集に案内された者ばかりでなく、使節団の下級メンバーや、一人二人の個人的旅行者にいたるまで、ヨーロッパ各地で、中国のモノや情報に接した背景には、ヨーロッパの歴史におけるこのような蓄積と流布とがあった。彼らはヨーロッパへの旅に上るに先立って中国の現況について、特にヨーロッパ列強への軍事的敗北について、予備知識をもっていた。ヨーロッパへの往復途次の上海・香港や西洋の植民地では、中国の軍事的・政治的・経済的屈服の現実を眼のあたりにして、そのような予備知識を確かめた上さらに認識を深めることが出来た。しかも日本人たちは、中国から最も遠いヨーロッパ本国で、少なくとも過去二、三世紀にまでさかのぼって蓄積された中国の各種のモノに接した。中国の現況についても、中国での寄港地において知りえたよりも清朝の宮廷と政府の内部にまでふみこんだ情報に接することが出来た。

そのようにヨーロッパ内部にとりこまれた中国のモノと情報の厚く深い蓄積に接することは、同時にそれを可能にした、ヨーロッパの中国に対する関心と知的・経済的・軍事的な力の強さを知ることだった。なかでも、一九世紀中葉から仏・英・ロシア等各国に新しく始まったさまざまなタイプの中国研究は大きな意味をもっていただろう。ヨーロッパに赴いた日本人達は既に上海や香港においてその一端に接していたが、ヨーロッパ本国において、そのような中国研究の本拠に接した。中国を中華たらしめる聖人の道の典籍が組織的に収集され研究されている成果は、上海や香港における政教衰微という現実を背景にして、日本人たちに強烈な印象を与えた。それは中華を誇る古い帝国の「井蛙管見」と、その国によって夷・蕃とされて来た西洋諸国の知の中国への積極的関心と把握との対照を示したのである。Ⅳ節でより立ち入って論じられるが、これまでに見たように、この時期を通じて、西洋「探索」の初めての旅は、実は同時に、中

国との、多くの場合予期しない最初の出会いでもあった。同じ旅の両面の経験は、互いに規定しあい不可分に結びついていた。その意味でこれを西洋・中国複合経験ということが出来よう。

Ⅲ　世界像の転換と中国像の転換

こうして、西洋世界の「探索」行の中で中国をも知るにいたった人々は、それまで抱いて来た西洋像とともに中国像をも大きく変えるにいたった。彼らの西洋像と中国像との転換は同時に併行して進み、それはやがて中華的世界像全体の変容にゆきつくことになったのである。一方で久しく「蛮夷」とされて来た西洋は、中華世界を軍事力や科学技術といった形而下の「術」において圧倒しているにとどまらないことが発見された。まだ議会政治、政党政治といった政治制度を理解するまでにはいたらなかったが、それを支える政治文化さらに文化一般の美質は、日本人たちの心をもとらえた。人は能力を自由に発揮して活躍し、その機会は平等に開かれている。しかも倫理風俗は厚い。学問知識もすぐれ、とりわけ中国の聖人の道をも究めている。

これに対して中国は、中華を誇り慢心するがゆえに、そのような西洋世界に盲目で、肝心の政教は萎微している。支配層は頽廃して人民への教化を怠り、それゆえ人民の風俗倫理は乱れている、というのである。こうして西洋への評価は蕃夷の観念から解放されて上昇し、中国へのそれは中華観念をはぎとられて下降する。いうまでもなくこのような世界像変容のプロセスは多様であり、とりわけ、儒教とその世界像そのものを全面的に否定するか否かは大きな問題だろう。ただ、おそらくこの当時には、儒教と儒教的世界像を完全に捨てる者は、一部の洋学者にとどまり、大勢は、儒教を何らかの形で信奉しつつ儒教的世界像を修正する道をとったように思われる。広島藩儒枢村田文夫の次のような文章

は、このプロセスをよく示す一例である。

「孔子の春秋を修むるや、諸侯夷の礼を用うれば則ち之を夷とし、夷にして中国を用うれば則ち之を中国とす。蓋し正大公明此の如し。而して後以て天下之公道を明かにす可し。枢西史を読むこと茲に年有り。又嘗て其地に遊び其治教民風を熟察するに、各国異同有りと雖も概して之を論ずれば、則ち倫理之正、習俗之厚、往々支那に卓越す。……本邦と支那とは、壌地最も近く伝学最も蚤し。是に於てか学者或は支那を尊びて以て中国礼儀之国と為し、西洋を卑みて以て蛮夷無礼之国と為す。是れ其非を知らず、豈誤りならざらんや。夫れ巳を華と謂いて彼を夷と謂い、各其国体を辱しめざるは、また本を貴ぶの常道なり。然れども夜郎自大、我の短を蔽いて彼の長を棄て、彼の是を罵りて我の非を誇り、善悪転倒、邪正錯置、是れ孔子之意に非ず。且つ何を以てか天下之公道を明らかにせんや」[58]

孔子の真意を「天下之公道」と結びつけ、中国の歴史的事実から引きはがして、抽象化普遍化し、そのことによって、中国をも西洋をも実態に即して、公正に評価する道を開くものといえよう。

このような西洋・中国複合経験の衝撃とそれがもたらした世界像の転換は、攘夷を志しそのための敵情偵察―「探索」―を目的として西洋諸国に向った人々にも攘夷の放棄と開国への転換を促した。彼らは幕藩体制崩壊・明治政権成立の前後にいち早く、新しい世界像にもとづいた対外政策や世界史の理論を構想し提唱した。彼らはそのような政策の提案や著述によって、幕府や諸藩の中に活動の場を獲得し、明治新政権成立とともに、その中枢から周辺にわたるさまざまな立場で活躍するにいたった。もとより新しい対外政策と新しい世界史理解には、主流から傍流まで分化が見られた。以下、そのような分化にも留意しつつ、新しい対外政策の中に現れた対中国政策、新しい世界史理解の中の中国像を概観したい。

世界像の転換に裏づけられた、新らしい対外政策の基本は、開国と「四海横行」だった。西洋行の中途で経験した、

中国人船員からも軽蔑されるという屈辱感が、その代償のように、海軍と商船隊を興して「海外に横行」し国威を発揚するという抱負を呼び出している例は前編で見た。自己の西洋・中国複合経験をもとにして、このような対外政策を、国内の体制変革・富国強兵・貿易政策と結びつけて、最も組織的に構想した指導者の一人は五代友厚だった。パリから藩庁要路に送られた彼の書簡には次のように説かれる。

「天下列藩志を一にして国政の大変革を起し、普く緩急の別を立、富国強兵の基本を相守、国政を振起せば拾餘年の功を待たず、亜細亜に濶歩すへし」[59]

これが五代たち薩摩藩士一行の西洋・中国複合経験を通じる思想転換の結論であり、五代はさらに攘夷政策をとる指導者たちの思想転換を促すため、彼らを西洋に送るよう提案するのである。

「富国強兵」は、西洋のそれにならった外国貿易を柱としていた。そしてその外国貿易の中で市場としての中国は重要な位置づけを与えられていた。幕末における市場としての中国への関心をよく示すのは一八六二（文久二）年、千歳丸によるグループをはじめとして四回にわたる幕府調査団の上海派遣であり、千歳丸グループには、諸藩の活動分子が加わった。その他各藩の多くの有志が上海を訪れたが、最もよく練られた政策を展開したのは、五代友厚だったといえよう。彼自身薩摩藩の命を受けて千歳丸の上海行に参加しており、その時すでに上海貿易についての具体的な構想をたてていた。この構想は、一八六四（元治元）年の意見書ではさらに発展して、上海経由の対西洋貿易とならんで、米・砂糖・海産物などの中国市場への輸出の計画が展開され、上海だけでなく、やがては広東・天津へも商品を送ることが提案された。[60]

五代の場合、中国の魅力は輸出市場としてのそれにとどまらなかった。彼が、一八六五（元治二）年ヨーロッパ視察と交渉の旅の中でロンドンから書き送った総合的政策一八條の提案では、中国は労働力市場としても注目されるにいた

っていた。国家連合としてのドイツにならった「大名会盟」、それを背景とし、西洋の会社をモデルとした「商社」の設立、そして貿易による富国強兵構想の一環として、「印度人支那人を雇ひ諸耕作をなさしむ事」[61]が提言されていた。前稿で見たように、西洋とくに英国の定期船によって、西洋に往復する人々は、中国人とインド人が船員として使われていること、それは低賃金によって「我国へ徳を付」[62]けるためであることを見抜き、同じ政策が「我国を安ずるの基」[63]となるだろうとしていた。五代の中国人労働者輸入という、当時の日本の経済発展と労働力需給の状況を考えればおそろしく早熟な政策は、このような意見と共通の背景から生まれたものだろう。このような中国人労働者導入案の背景には、輸出のための商品作物増収の必要も意識されていたのかもしれない。先にふれたこの一八條提案の前年一八六四年の意見書では、すでに西洋産の耕作機械の導入が提唱されていた。中国人労働者導入をという提言は、あるいは西洋産の耕作機械導入よりもさらに安価な方策として中国人、インド人労働者の導入が考えられたのではなかろうか。

この中国人労働者導入の提言はまだ実現の条件が熟していなかったためか、その提言の後実行されたあとが見られない。しかしそれは明治新政権成立後ほどなく、北海道開拓使の農業政策の中に実現した。開拓使は、一八六九（明治二）年の設置直後から、北海道海産物などの輸出市場として中国に注目し、一八七二年には上海に開通洋行を設けた。しかし、官営の内国植民地として北海道の経営を強行した開拓使は、外に向って市場確保に力を注ぐ時、内部でさらに深刻な壁に直面した。本土からの良質の労働力の受け入れと定着が遅々として進まなかったのである。開拓使はそのため外国人への土地貸付・外国人移民導入を考慮するにいたり、「非常ノ地ヲ拓ク宜ク非常ノ挙ナカルベカラズ」[64]として、開拓使自ら中国人労働者を雇傭する政策にふみ切った。一八七五（明治八）年、開拓長官黒田清隆の三条太政大臣あて「清国人民北海道移住之義伺」案文には次のようにのべられていた。

「聞ク、清国人ノ売奴トナツテ苛役セラル、者多シト、今之ヲシテ我北海道ノ地ニ移シ、以テ我良民タルヲ得セシメ、其虐

使苦役ニ耐ル力ヲ移シテ開墾種樹等ニ従事セシメバ、彼等ニ於テ実ニ生死肉骨ノ恩ヲ得励精盡力スルニ必セリ」[65]

中国社会に「売奴」として「虐使苦役」される労働力が多く存在することに注目し、それに「耐」えて来た労働者ならば、北海道の農業労働に、恩を売って使用することが出来るだろうというのである。開拓使はこのような基本方針にもとづいて「招募」と「自力移住」とについての規則を定め、これを太政官から在清国の日本公使・領事のほか、日本内地の開港開市場のある府県にも通達させようとした。この案がどこまで進められたかは明らかでないが、開拓使はこの年、内務卿大久保利通の主導のもとに半年にわたって清国に派遣された貿易・経済視察団に中判官西村貞陽以下一〇名を送り、市場調査を行なったほかに一〇人の中国人を雇入れた。そのほとんどが外国人に雇われる労働者や車夫などで、農業経験者は一、二名にとどまった。翌一八七六（明治九）年札幌近郊丘珠の開墾にむけられたこの中国人グループは、三年の契約期間満了前に二人が帰化したほか他は病死・自殺・内輪もめによる殺害、解約放逐・帰国という悲惨な結果に終った[66]。開拓使はなおこの他中国人の皮鞣職人二人、通弁一人を雇傭しているが、このような中国人労働者導入政策が、幕末の西洋・中国複合経験の背景のもとに生れたことはかなり明らかだといえよう。幕末に西洋に赴いた人々は、太平洋の東西両沿海地帯でも、東南アジアでも、中国人が西洋人によって低賃金で肉体労働に酷使されている現実を知り、富国強兵の新構想のもとで、そのような政策にあやかることを提案していた。とりわけすでに見たように、薩摩藩の富国強兵政策の中心人物だった五代友厚が中国人労働者の導入をいち早く構想しており、創設期開拓使の幹部が薩藩出身者に独占されていたことを考えれば、幕末の西洋・中国複合経験と開拓使の政策とが関連していた可能性が高いのではかろうか。

このような上海を窓口とした中国とのまた欧米諸国との貿易および情報収集に、幕府と諸藩とは互に対抗してしのぎを削った。そうした状況の中で幕府にとっては反幕府諸藩の密貿易を封じこめるために、中国との間に何らかの形で条

約を結ぶことが緊急な課題となった。しかし、幕府側が中国に対する二世紀半にわたる「祖法」を大巾に変えるとしても、中国は日本に対して国を開くだろうか。中国に開国を促すには、どのような政策をとるべきだろうか。一八六五（慶応元）年、幕府はオランダ公使からの密告によって、長州藩が国禁を侵して米国と上海で武器の密貿易を行っていることを知り、外国奉行支配の官吏を調査のため上海に派遣した。

メンバーの一人杉浦愛蔵はすでに一八六四（元治元）年に遣仏池田筑後守使節団の一員として西洋と中国を見聞していた。彼が加わって起草された復命報告書は、中国政府の対日態度を分析した上で、その中国に開国をさせる見通しについて次のようにのべていた。「一体支那人居儒尊大より御国之義者属国同様ニ見做し候様ニも被存、其上海外各国与條約取結之者、可相成丈ケ差拒え候習風[67]」であり、「仮令御国より北京江使節差遣候与も容易ニ調ひ可申見据無之[68]」。さりとて長崎奉行と上海の道台との間で条約をまとめてみても、道台は「従来之弊風ニ而専恣貪利之挙動多く[69]」条約に実効があるのは彼の在任中にとどまり、また道台の管轄は限られているから条約の効力は地域的にも制限されるとする。そのような手づまり状況をさらに分析した上で、彼は次のような見通しと提案をのべる。

「篤与（とくと）一体之事情相探勘弁仕候処、厦門之賊勢弥以盛大ニ相成、官軍屢々敗続（ママ）および英仏之援兵も追々手を引き、何れにも仔細有之事ニ相聞、北京之都府も軍務多端ニ取紛候哉、遠境之県府迄者自然政令も届き兼候事与相見え、各県之道台自己貪利之処置而已いたし、名者道台与号し候へ共、絶而信用難相成様ニも被存、其上荷蘭コンシュル申聞候ニも三ケ年之中ニ者大変革出来可申趣、右事実者難計候へ共、何れにも不穏之事件可差起哉も難期候間、尚形勢御傍観之上御籌策有之候方可然被存候、尤一種之条約御取結之義者成否得失者差置、何分可然義与も不被存、但一隊之御軍艦を以て直ニ天津ニ廻り、各国同様条約御取結相成、上海江者御国商船も御差遣相成候間、同所をはしめ其筋之官員被差置、居留地等も各国同様之振合を以て借受置候ハハ、大変革等有之候節虚隙ニ乗し意外之御得算も可有之候[70]」

厦門を占領した太平天国軍が勢を増して清朝政府軍が敗北を重ね、同治以来清朝政府にてこ入れして内戦に軍事介入

して来た英・仏軍も手を引き、三年のうちに「大変革」――清朝支配の崩壊であろう――が起るかもしれない。その「虚隙ニ乗し」て「意外之御得算」を収めるため、軍艦を天津に送って圧力をかけ、西洋各国なみの通商条約を結び居留地を獲得させようというのである。

この外国奉行支配の調査団の上海派遣はそもそも駐日オランダ公使の通報によって始められ、上海での調査は、道台丁日昌との接衝を念めて、全て上海駐在オランダ領事（T. Kroes）の手引きで行われた。引用にも明らかなように清朝統治崩壊の見通しもオランダ領事からの情報だった。そして天津に軍艦を派遣してその圧力によって開国通商を強要するというのは、この数年前、一八五七年、一八六〇年の二度にわたって英仏両国が行った砲艦政策の踏襲だった。杉浦愛蔵はこの後、一八六七（慶応三）年には、再び徳川昭武の一行に加わって西洋と中国とを見聞し、このような中国観をたしかめた。そして崩壊前夜の幕府にとって、実現の可能性を疑われるような、砲艦政策による中国への開国強要の構想は、明治新政権の日清修好条約締結の際にも存在し、その一部が実現された。しかしやがて見るように、清朝支配層内部には、この報告書にのべられるような、日本を中国の「属国」視する伝統を克服した新しい政治勢力が抬頭していた。明治新政権が、早発的な砲艦政策に全面的に訴えることなく中国との間に修好条約を結びえたのは、中国側の彼らが対日交渉の主導権をとったのによることが大きかったのである。

西欧・中国複合経験を通して開国と富国強兵を構想するにいたった人々は、このように西洋の中国観、中国政策の影響をうけてそれにならおうとした。しかし、彼らと西洋行を共にし中国経験をも共有しながら、中国に対する態度、中国政策において彼らといちじるしく異なる人々も存在した。

幕末西洋行の一つの特徴は、中村敬宇のような幕府学問所の教官から諸藩の藩儒にいたる儒者たち、その他儒学を篤く信じる人々が積極的に参加し、同行しない儒者たちも彼らを通じて西洋を知り、中国の士人と交わろうとしたことだ

った。そのこと自体、西欧の衝撃に対する日本儒学の反応を、中国や朝鮮のそれと別つ特質の現われだったといえよう。こうして聖道を奉じながら西洋に渡った人々は、西洋という異質な世界の探索と理解にきわめて積極的だった。同時に彼らは、中国から西洋本国にいたるまで各地で接する中国人の社会に筆談によって深く入ってゆこうとつとめ、しばしば良質の筆談の記録――テープ録音の一八六〇年代版とも云うべきもの――を残した。彼らは同行の知的メンバーの中でも、その点で洋学派知識人と明らかに異っていた。以下、彼らの、西洋同調派とは異なる、中国に対する態度、対中国政策を二つの筆談の記録からうかがおう。

第一は、一八六〇(万延元)年遣米使節団に、従者に身をおとして加わった仙台藩士玉虫誼茂の場合。ホノルルで知った広東省広州出身で、科挙受験を中途で断念して国外に出、薬屋を経営する潘麗邦という人物との筆談。

「現今文学之盛、唯貴国与我国耳。而近来洋学流入、大害聖道。貴国亦無係此患否。玉誼
現下文学、惟我国与貴国同。而西洋之学大悖倫常、殊不足取。所慮、近世人心厭常喜新、間有附和。是亦世道人心之変、秉聖教者堪為感慨。麗邦
大然。玉誼
……
近聞、貴国与英夷有争闘之事。先生審知之否。玉誼
逆夷起衅始末僕已詳聞。真所謂目撃而心傷者。蓋戎狄之人性等虎狼、立心残忍、其与聖道毎々相左。近聞、于本春在天津北河地面変仗。未悉真否、俟有家報、始知真実。麗邦
貴国尚如此。我国自去歳夏六月、開互市於武州横浜港。黠夷之跋扈不可勝言、後来之害不可計、是予所以深歎也。玉誼[21]」

ここには、日中両国の「聖道」と「文学」の共有をもとにした連帯感と、「戎狄」の軍事的侵略・通商と「洋学」の危険に対する同憂を明らかに見てとることが出来よう。

第二は、浜松藩儒名倉予何人（あなと）の場合。彼はすでに一八六二（文久二）年の千歳丸の調査団に加わって上海を訪れ、筆談によって、城内の中国人官吏・士人と親しい交わりを結んでいた。名倉はその二年後一八六四（元治元）年横浜鎖港交渉のためのフランス派遣池田使節団に加わって途中再び上海を訪れ、先年親しい交わりを結んだ読書人の一家を訪ねた。その旧友の父王仁伯との筆談記録には次のようなやりとりが記されている。

「此番到西洋有何事　仁伯
……我　帝王悪洋虜仇讎不啻也蓋所以有此行也
後日能我中国同心滅此悪類乃大幸也　仁伯
兄言大善[72]」

元来名倉が、上海で中国士人の間に筆談によって深く入っていったのは、「聖道」を奉ずるものとして、西洋諸国の軍事的・文化的脅威に対する憂慮を共にする者を求めてだった。そうして出会った同憂の士との間では、このような日中共同の攘夷が語られていたのだった。名倉はさらに、パリにおいて、フランス政府との交渉と西洋見聞の結果、横浜鎖港の使命を放棄して帰国し「西洋ノ時情ヲ委曲上言[73]」するという、正使池田筑後守の開国論への転換を聞いた日、日録に次のように記した。

「吾輩竊カニ按ズルニ方今吾邦ノ形勢ハ何レニモ洋虜ト一戦セザレハ已ムマジキナリ若シ洋虜ト戦フ事モアル折ハ應援ヲナスノ国ナクンバアルベカラス幸ニモ支那ハ固ヨリ我邦と唇歯兄弟ノ国ナル故ニ之ト交リヲ結ヒ旧盟ヲ尋[つ]ギテ共ニ掎角ノ勢ヲナスニ此カズト思ヘリ勿論朝鮮トモ深ク交リヲ結ビテ声援ヲナサシムベシ[74]」

彼は同時にこのような立場からの意見書を正使に奉った。後に見るように、名倉は、明治政権成立直後の外務省に出仕し、このような立場から日中両国の国交樹立をはかろうとした。日清修好条規の締結の交渉も、彼の王仁伯への斡旋依頼からいとぐちがつけられたのである。

一八七〇（明治三）年の予備的接触から七三年の批准書交換にいたるまでの日清修好條規締結交渉は、西欧列強の対アジア政策への同調から日中提携による西欧列強への対抗まで分化していた、中国に対する態度と政策が、次第に前者に収斂してゆく過程だった。同時に、日中両国の士人の間に織りなされる、外交交渉という形の初めての緊密な直接々触の中に、幕末を通して日本の士人の中国の相手方に対する理解がどれだけ実態に見あっていたか、またいなかったか、事実によって明らかにされるにいたった。この過程と幕末の西洋・中国複合経験との関係を細部までたどることは難しいが、出来る限りこの点に焦点をあわせて日清修好条規締結の過程を概観したい(75)。

明治新政権成立直後の外務省には、当然のことながら、旧幕臣を含めて、西洋経験を有する人々が集められていた。寺島宗則、津田真道、花房義質、馬渡俊邁らがそれであり、彼らの中にまじって名倉予何人の名も見られた。彼らの多くが、日中国交樹立のための中国派遣使節団に加わったし、津田と花房とは、日本側案文起草の任に当ったのである。

一八七〇（明治三）年、外務省が、中国との修好通商条約締結の交渉にのり出すことを決定した時、省内にはこの課題をめぐって二つの立場が対立していた。かりにそれを西洋志向派と中国志向派と呼ぼう。両者の構想と対立点は相次いで提出された二つの意見書に明らかである。先づ、西洋志向派として外務権少丞宮本小一郎の「支那通信議案」。

「支那へ通信スルニ英佛等ノ内彼地ニ在留スル公使へ紹介媒酌ヲ頼ムヘシト又日本ト支那トハ同臭唇歯ノ國柄ナレハ突然通信ノ義ヲ申入ル、方可然ト二議アリ日本ノ國體ヲ立漢學者ノ口ヲ防クニハ第二ノ説ニシカズ彼國ニテモ恐ラク西洋諸州ノ紹介ヲ受ケ來ルヲ快トセザルベシ然レトモ是迄清國トハ漠然交通セス相互ニ一使介ヲ走ラセシ事ナキハ萬國共ニ知ル處ニシテ日本ニ來住スル支那人ノ處置モ條約未済國ノ取扱ニナシアルナリ然レハ情味ニ取テハ骨肉ノ思アルトモ交際ノ儀式ヲ表立論スル時ハ西洋各國ハ舊友ニシテ支那ハ他人ナリ今日交際ノ條理ヲ逐テ正明公大ニナリ亞細亞ノ諸州トイヘトモ歐羅巴ノ公規ニヨラサルヲ得ス然レハ假令支那ノ事情ハ西洋人ヨリ詳悉ニ心得居ルトモ一通リノ媒酌ハ英佛ノ内ヘ依頼セサレハ始終不都

合ノ事アルヘシ
……

條約ノ體裁

既ニ通信シタル上ハ交際ト貿易ノ條約ヲ立サルヲ得ス此條約ヲ立テルハ窮屈ノ事ナレハ兎角曖昧タル事ニナシ置度所存ハ日本支那兩國ノ人情同ジク然ル様子ナレドモ傍ニ西洋人アリテ其曖昧タル處置ヲ窺知リ其例ニ習ワン事ヲ乞ヒ是ヲ拒ミ支那日本ハ兄弟ノ國ナレハ特例ナリト云フトモ西洋人決シテ承知スマジケレハ必ス兩國トモ大害ヲ引出スニ至ルベシ故ニ條約ハ矢張嚴重ニ立置内々別段ノ懇意ヲ盡スハ格別ノ事ナリ扨其體裁ハ矢張西洋各國ト支那ト結ヒタル通リニ隨フベシ……右ノ手續ナレハ此條約ヲ結フハ易ニ似テ實ハ難シ漢學者ノ論ト西洋人ノ横合論トヲ防ガネハナラヌナリ此ノ如ク難ケレハ突然勅使ヲ遣サルヨリ小使ヲ差シテ彼ノ書類其外ヲ取集メ暫ク評議ヲ盡クシテ後使節ヲ遣ワサルヘシ」[76]

宮本の意見書で「漢学者ノ論」として批判された中国志向派の立場をまとめたのは、もと浜松藩士名倉予何人、今、外務大録名倉信敦の「清国交際拙議」だった。

「清國交際は
皇國にて卓然として特使を被差遣候方可然又英法等の紹介にて清國と交誼を取結ふへきの説あり管見にては斷然として然るへからさるなり
一……
皇國にて支那と交を締ふ事は西洋諸國の好まさる處なり其不可一なり
一西洋諸國にて我隣交を不好とき大に通信の妨碍を爲すへきなり然らは遂に我をして清國と交誼を締ふ事を得さらしむへし
既に舊幕の時其事あり實に殷鑑不遠なり是其不可二なり
……
一皇國と清朝とは從來魯衛の政にして脣齒兄弟の國柄なり然るに特使を遣す事能はすして遠く數萬里外の西洋に紹介をなさしむるは愚にして且迂ならすや是其不可四なり……」[77]

その後、おそらく外務省の方針として、宮本の主張する、「勅使」――名倉の「特使」――ではなく「小使」派遣をという案が採用された上で、名倉の意見が求められたのだろう。それに対する彼の答申書は、「清国交際拙議」を補って具体化している。

「　支那航海手順の事

……

一上海着船の節即刻上陸清國官員の家を東道の主と致すへき事

……

　先通信次通商の事

一皇國と清國とは從來唇歯兄弟の国柄に候間西洋各國の如く六ケ敷條約を省き彼此同國の交を締候清國の志に候

……

一通信を締候上は彼此の通商隨意たるへき事

　但通商條約の件々も自ら西洋は殊にすへき事

……

一欽差小使愈入唐の事に御確定の節は支那上洋の官員へ預一書差遣し東道主人差支無之様可致候事[78]」

二つの立場の対立点は明瞭である。第一、日中両国の「魯衛ノ政」「唇歯兄弟ノ国柄」という伝統的親近関係を重視するか、新しい西欧国際法秩序を前提にして「西洋各国ハ旧友ニシテ支那ハ他人」と判断するか、これが対立の基本である。第二、従って中国との国交樹立についても、「西洋人の横合論」を防ぐためにも西洋諸国の仲介を依頼するか、西洋諸国が日中直接の国交樹立を好まず妨害するだろうことを前提にした上で、中国と直接交渉するか。後の立場をとれば日中の修好は、西洋諸国に対する連携した対決という意味をおびるにいたる。第三、条約の内容。西洋各国と中国が既に結んだ条約にならって詳細かつ明文で規定するか、修好だけの簡単な規定にとどめるか。第四、中国に対して直ち

に「特使」を派遣して直接交渉に入るか、さし当り「小使」を送って調査をさせ、検討の上で正使を派遣するか。

この年七月東京発、一〇月帰着、上海経由で天津に往復した外務権大丞柳原前光以下の予備交渉の始終は、このような二つの路線の折衷だったといえよう。先ず「特使」ではなく正式交渉の命を受けない「小使」が派遣された。予じめ英・仏・米・蘭・独五国駐日公使に斡旋が要請され、結局全てがこれに応じたが、実際に仲介した様子はうかがわれず、後に柳原らが李鴻章と論談した際も、日中の「唇歯隣邦至厚友誼」のゆえに西洋公使の仲介という主張を押し切って来た、と申したてた。[79] また、既にこの斡旋の要請に先立って名倉信敦の答申に提案された、「支那上洋（―上海の別称）の官員へ預一書差遣し東道主人差支無之様可致候事」が実行にうつされた。名倉信敦から、旧知の、日中提携して「洋虜」を攘うことを論じあった王仁伯に、道台はじめ地方官僚への斡旋を依頼する鄭重な書翰が送られたのである。[80]

上海に到着した一行が、道台と接触し、道台の仲介によって天津まで赴いたこと、外務卿からの總理衙門宛の書翰を手交するため入京を望んだ柳原らが、「古所謂大信不約」を理由に条約無用論を唱える在天津の三国通信大臣成林に阻止されたこと、しかし、政局の中枢に台頭しつつあった洋務派の巨頭曽国藩、李鴻章と接触することによって局面を打開し、外務省からの指示に反して、現地で条約案を急拠起草して手交したこと等、この予備交渉にいたる過程は、これまでの研究で明らかである。この天津での予備交渉の全体にも、西洋志向と中国志向の二つの路線が交錯していた。一方では、柳原らの「和漢条約案」は、西欧国際法の原理に依拠し、中華帝国を中心とする伝統的な通信の関係、冊封秩序を根本から否定していた。しかしながら他方、三国通信大臣によって閉された扉を何としてでも開けようと李鴻章に訴える一行の発言には、日中提携による西洋列強との対抗という立場がはっきりと現われていた。一行はすぐ前に見たように、自分たちの中国へのアプローチの形式自体が西洋諸国の仲介を乞けた直接交渉であることを強調した。李の総理衙門宛公函によれば、

「日本委員柳原前光等……来見、礼貌詞気、均極恭謹。談次以英法美諸国強偪該国通商、伊国君民受其欺負、心懐不服、而力難独抗、雖於可允者応之、其不可允者拒之、惟思該国与中国最為隣近、宜先通好、以冀同心協力、擬俟貴衙門示下、再取進止等語。[81]」

これによれば、日本の英・仏・米各国との通商條約は、それら諸国に強制されだまされて不本意であったが、単独では抗しきれなかったために締結したのである。中国と連携して西洋列強に対抗するために、是非中国との条約を結びたいというのが、李鴻章へのアピールの要点だった。

この文章の冒頭はすでに、李鴻章が柳原らの真剣な訴えに心を動かされた様子を示しているといえよう。李はこれに続いて日本の開国についての彼の認識を次のようにのべる。

「鴻章前聞、日本与英法通商立約、簡厳特甚、海関不用西人、伝教不許開禁、既此二節、已杜許多後患。又購求泰西機器兵船、仿製精利鎗砲、不惜工本。勿謂小国無人。[82]」

そして、日本を「小国無人」と侮ってはならないということばに続いて、面談した一行五人中の名倉信敦に論及する。

「此来五人中有曰倉信敦者、具道前数年屢至上海金陵敵営察看軍容、言之歴歴如絵、与之深談西事、似有大不獲已之苦衷。[83]」

李鴻章は、一行の中特に名倉の名を挙げる。彼は名倉の中国の要部上海・南京（金陵）の軍事情勢と西洋問題（「西事」）とについての意見に耳を傾け、それを高く評価したのである。五人の中、西洋に渡ったのは権小丞花房義質と名倉の二人、そして西洋見聞に匹敵するだけの中国経験を重ねている点で、名倉は花房にはるかにまさっていた。上海とその周辺を基盤に地方官僚を掌握し、対外交渉に関心をよせ、西洋技術を導入して台頭しつつあった新勢力としての李鴻章に、日本人の中でもっとも注目していたのも、おそらく名倉だった。名倉のこのような西洋・中国複合経験が李の心を動かしたといえよう。李はこれに続いて、対日政策の基本認識をのべる。日本の中国文化の深い理解といい、中国は日本と

連合してその外援となるべく、日本を西洋の外府たらしめてはならぬといい[84]、李の主張は、柳原・名倉らのそれに呼応するものだった。前の引用にも明らかなように、彼は早くから日本の変革と開国に注目しており、その上で初めて日本人に出あって、このような政策を固め、条約を結ぶべきことを進言したのだった。

こうして「漢学者」名倉信敦を含む一行の日中連携論が、李鴻章を動かした結果、西洋諸国の仲介を排除した直接の条約締結交渉は、日本側の予想以上に速かに本交渉に進んだ。日中双方、特に中国側が条約締結に積極的になり本格的に取り組むにいたったのである。こうして、本交渉はまる二月もかからずに妥結した。しかし、逆説的にもこの本交渉の過程の中に日本側の対中国路線の大きな変化と、その中国認識が現実に引離されそれを後追いしている事実とがあらわになった。

中国との条約締結のために西洋流の砲艦政策を提唱した杉浦愛蔵の意見書（二四ページ参照）にもあらわだったように、日本側には、中国人は尊大で日本を属国視しているから、日本の平穏な国交樹立要求にはとうてい応じるまいという見方が広がっていた。また事実、この当時中国側では、朝廷に対して、華夷秩序を前提として、日本は伝統的に中国に対し冊封関係にある「臣服朝貢」の国だから、条約を結ぶべきでないという上奏が相次いだ。これに対して李鴻章は、歴史の事実に照して、日本は中国の属国ではないとし、開国後の日本の富強に注目して「これを籠絡すればあるいは我が用となり、之を拒絶すれば則ち必ず我が仇とならん[85]」という対日戦略にもとづいて、条約締結の必要を力説した。さらに李はこれと前後して、上海において長く対外交渉に当り、日本人との接触の経験をつんでいた署江蘇布政使応宝時らに、柳原らの「和漢条約案」の検討と対案の準備を命じた。

日本側においても予備交渉から本交渉に進む段階で大きな路線の修正が行なわれた。正式の外務省案を起草するために刑部中判事津田真道が本官のまま外務省出仕を命じられ、彼はさらに柳原前光とともに特派全権大臣伊達宗城の差副

に任じられて、天津での交渉の中心となった。津田は西周らとともに幕府留学生としてオランダに学び、当時西と並んで西洋法制の権威として知られていたのである。他方この本交渉代表団からは、予備交渉グループの一員として少なからぬ働きをした名倉信敦の名が消えていた。条約案の内容も柳原らの「和漢条約案」から大きく変っていた。津田の「日本国清国隣交貿易和約章程案」は、一八六一（咸豊一一）年の清独修好通商および航海条約の、ほとんど引き写しであり、中国に対して西洋諸国と同様の不平等条約を押しつけようとするものだった。

中国側は、この新しい日本側草案の不当をきびしく批判した。日中両国は「同文同俗」「互に往来し、隣誼を厚くすべき唇歯の邦」であるにもかかわらず日本側草案は、「西人の約書を照抄し、唯一方向の体裁」である[86]。前年の柳原たちによって提出された「和漢条約案」からの立場の大きな転換とくいちがいも追及の的となった。中国側はこの日本側草案を交渉の土台とすることを拒否し、かわって応宝時・陳欽が準備して来た草案を提出し、激しい応酬の後これが交渉の基礎とされるにいたった。これは、アヘン戦争後、一八四〇年代の西洋諸国との諸条約締結以来、中国が外国との条約締結交渉において、自から草案を準備し、それをもとにして交渉を進めた、初めての企てだった。

交渉は難行したが終始中国側がリードし、主要な争点については、ことごとく日本側の抵抗を押し切って中国側の主張が実現した。第一に、条約は、先に見た日中両国が、西洋諸国との関係とは異なる、「同文同種」「互に往来」する「唇歯の邦」という特別な関係にあるという前提の下で、対等の条約とされた。西洋諸国との不平等条約の網にとりかこまれた東アジアで、二つの国の間にはじめて、このような前提のもとで相務・平等の条約が結ばれたのである。第二に、中国側は一八四〇年代の諸条約において、西欧国際法と条約関係への無知のゆえに最恵国条項を認めたが、それ以後これを否定することに力を注ぐにいたっていた。日清修好条規で初めてそれに成功したのである。第三に、条規第二条には、第三国からの「不公及ビ軽藐之事」があった場合の相互援助の義務が定められた。これは、既に見た、中国は日本

の外援となるべく、日本をして西洋諸国の外府たらしめてはならないという、李鴻章の東アジアにおける大戦略を背景とし、応宝時と陳欽によって条文化されたものだった。それは柳原らの日中提携的態度に対する李の積極的応答をうけつぐとともに、日本側の、日中両国関係への西洋諸国の干渉―「西洋人の横合論」―への恐れを優先させる西洋志向的態度に対する、正面からの挑戦だった。

この規定は、日本側にとって大きな衝撃だった。そのため日本側は、一八七二（明治五）年批准交換に先立って柳原前光を三たび天津に送りこの第三条をはじめとする条約の一部修正を求めた。中国側はもちろんこれに応じなかった。一八七三（明治六）年、日本は外務卿副島種臣を送り、天津において日清修好条規の批准交換が行われた。この時日本側は、特に軍艦二隻を連ねて中国に赴いた。杉浦愛蔵が幕末に主張した、砲艦政策による中国開港という政策はこうして曲折の末形をかえて実現したといえよう。逆にいえば、その他の点では、この条約締結交渉は、中国側の圧倒的な勝利に終り、日本側の西洋志向路線は完敗を喫した。

この交渉にのぞんだ中国側を特徴づけるのは、第一に上海道台応宝時をはじめ「條約港の対外交渉専門家の頭脳を集めて」「事前の十分な研究と用意とをもって交渉にのぞんでいる[87]」ことであり、第二に、この「準備作業」と交渉自体との全過程を通じて、總理衙門と連絡をとりながらも、新興洋務派の指導者、曽国藩・李鴻章の強力な主導のもとに行われたことだった。現に西洋行の途次上海に立ちよった日本人の多くは、応宝時と接触した。応は西洋列強との交渉に熟達していたばかりでなく、これら日本人たちと交わって日本理解につとめ、日本についての資料をも求めるほど熱心だった。それなのに日本側の応宝時についてのイメージは「支那自尊因陋の風習にとらわれ却って外国人に教督せられ…可笑至なり[88]」といった旧態依然たるステロタイプを出ぬことが多かった。応宝時らをひきい、長江下流一帯に新しい対外・国内政策を展開しようとする李鴻章あるいはさらに曽國藩らの存在を認識する日本人は少なかった。曽・李が日

清修好條規締結交渉の立役者になったという事実は、洋務派の勢力が対外政策決定の中枢にまで上昇して来たことを示していた。西洋行の途次上海を訪れた日本人たちは、上海を舞台にして抬頭しつつある彼らの動きをとらえきれなかった。中国官人の旧套墨守をわらった日本人たちの中国官人像の方が実は旧套を出ることがなかった。そのような歪んだ理解の蓄積という遺産に拘束されて、明治新政権の官僚たちは、李鴻章や応宝時たちの「籠絡」にとりこまれ手玉にとられるにいたったのである。

こうして幕末に西洋・中国複合経験をした者の間から、転換した世界像にもとづいて体制の変革と新しい対西洋政策・対中国政策の旗印をあげようとする者が現れつつあった時、同じ経験をした他の人々は、新しい世界像に理論的な表現を与え、それをもって人心の動向に働きかけようと企てていた。彼らの多くは幕臣であり、同時代でもっともすぐれた洋学派知識人だった。彼らは、自己の西洋・中国経験を通してえられた新しい世界像を理論化しようとつとめたが、その際、西洋とくに英・米両国で入手した、それらの国で広く読まれる世界歴史・地理についての書物に依拠することが大きかった。そして、これらの書物を通じて、一九世紀の西洋世界に広がっていた世界理解の新しいパラダイムが受容され、華夷的世界像にとってかわることになったのである。その著しい例として福沢諭吉と、西周・津田真道らをはじめとする幕府派遣オランダ留学生団の団長内田正雄とをとりあげ、福沢については「唐人往来」と『世界国尽』とを、内田については『輿地誌略』を検討したい。

一八六〇（万延元）年の米国行、一八六二（文久二）年のヨーロッパ行と西洋経験を重ねた福沢が、その経験を理論化して、人心に働きかけようとした最初の仕事は、元治・慶応の交にかけて、筆写で廻覧された「西洋事情」と「唐人往来」だった。「世界普通の道理」を信じて開国し国際社会に参入することを説く「唐人往来」は、中華的世界像にか

わって、ヨーロッパ・アジア・アメリカ・アフリカ・オーストラリアの「五大洲」という構成と、「上國」としての米国およびヨーロッパ・「下國」アフリカ・オーストラリア、その中間の「アジア」という進歩の段階からなる、新しい西洋産の世界像を枠組としていた。中国はアジアを代表する国として、日本の逆モデルとして描き出される。

「亞細亞洲も随分よき大洲にて人の數も多く産物も澤山あり、小細工物などは世界中に名を賣りたる程巧者に作り出し學問も出精し、中々亞非利加、澳太利の比類にはあらざれども、兎角改革の下手なる國にて、千年も二千年も古の人の云ひたることを一生懸命に守りて少しも臨機應變を知らず、むやみに己惚の強き風なり。其證據には唐土宋の時代より北方にある契丹、或は金、元など云ふ國を夷狄々々と唱へ、そのくせ夷狄と師をすればいつも負けながら蔭では矢張り畜生同様に見下し、己が方には何の改革も爲さず備もせず己惚許り增長して、遂には其夷狄へ國も奪取れたり。其後度々代も替りて明朝に至り、其頃今の清朝は矢張り北國の韃靼に居たるものなれば、明朝にては先々代の如く之を韃夷など、散々輕蔑したるに、又其韃夷に國を取られ、即ち今の清朝は昔の韃夷なり。然る處清朝になりては自國の近傍に夷狄と云ふべき國もなく、先年中、己が夷狄と云はれたることを今は早忘却して、今度は掛隔てたる西洋諸國の事を指して夷狄夷匪など唱へ、犬猫を取扱ふ様に心得、我儘ばかり働きし處、道光年中阿片始末の節、英吉利より痛き目に逢ひ償金など出して漸く中なをりしたり。其後こそ心付き國内の政事兵備を改革し外國との附合にも信實を盡くして不都合なき様にすべき筈なるに、又々性も懲もなく四五年前天津と云ふ處にて英吉利の軍艦と取合を始め不都合の始末にて、遂に英吉利、佛蘭西申合せ、大兵を指向けて北京へ攻入り、咸豊帝は韃靼へ出奔し餓死同様見苦しく落命したり。是れ皆世間知らずにて己が國を上もなく貴き物の様に心得て、更らに他國の風に見習ひ改革することを知らざる己惚の病より起りたる禍なり。言語道斷、風上にも置かれぬ悪風俗、苟めにも其眞似をすべからず。兎角亞細亞洲には此風俗あるゆゑ能々謹むべきことなり。……唐土など此道理（―「世界普通の道理」）を知らず、何でもかでも外國人は無法なるものと思込み、伊勢參宮の田舍者が宿引を疑ふやうに、深切にさるれば底氣味悪く思ひ、理屈を云ふて聞かすれば無理を云ふと思ひ、一から十まで疑心許りに凝り固まり、互の實情は少しも通ぜず、既に唐土阿片始末の節も、いよ〳〵阿片が國の害をなすならば、先づ國中に阿片煙草はふかすことならぬと法度を出し、其譯を英吉利へ篤と掛合ふて積渡を差留むるやう道理づく談判せば、英吉利にても他國の害になることを構ひ付けぬ理屈はなし、必ず穩に談判も行届きたる筈なるに、林則徐と云ふ智慧なしの短氣者が出て自分の國中に法度を出すことは先

づさて置き、うもすも言はず英吉利より積渡りたる阿片を理不盡に燒捨て、扨夫れより英吉利にても大に立腹して果ては師となり散々痛め付られたり。今日に至るまで世界中に英吉利を咎むる者はなくして唯唐人を笑ふ許りなり。是れ全く唐人が世間見ずにて道理を押立つることを知らざる己が不調法なれば自業自得、誰に向て愚痴の述ぶべきやうもなし」[89]

ここに描かれた中国は中華を誇りながら、その自国中心思想（エスノセントリズム）と伝統主義ゆえに、かつての文明の座からずり落ちてゆく老大国である。アヘン戦争からアロウ戦争にいたる西洋列強との交戦と敗北も、もっぱらこのような中国の悪弊が自ら招いたほとんど当然のむくいとして描かれている。小論でも度々ふれたように、林則徐は、幕末日本の多くの士人に、危機に瀕した祖国を支える忠臣として仰がれていた。ところが「唐人往来」では、彼の清国内における徹底的な阿片追放という事実に目をつぶり、林則徐を「智慧なしの短気者」に矮少化している。咸豊帝の熱河蒙塵と離宮での客死という清朝の危機は、福沢をはじめ、幕府の一八六〇年の遣米グループ、一八六二年の遣欧グループのメンバーが西洋行の各地で、西洋の情報源から最新の中国情報として聞き、強い衝撃を受けた出来事だった。だが「唐人往来」の記述には、福沢自身を含め（一五頁参照）、彼らがそのような清朝の危機とともに聞き知って注目した、咸豊帝死去をうけて展開した同治の中興の新しい動向は全くふれられず、中国像は暗黒一色に塗りこめられていた。

一八六九（明治二）年、明治新政権が成立し開国和親が宣言された直後、福沢は「日本国中の老若男女」に新しい世界を理解させるために『世界国盡』を刊行した。『世界国盡』は刊行とともに超ベスト・セラーとなり、同時代の日本人の世界理解に大きな影響を及ぼした。そこでは、中国は次のように描かれていた。

「支那（カラ）」は「亞細亞」の一大国、人民おほく土地広く……そもそも「支那」の物語、往古（ムカシ）陶虞の時代より年を経ること四千歳、仁義五常を重じて人情厚き風なりとその名も高かく聞えしが、文明開化後退去（トレサリ）、風俗次第に衰て徳を修めず知をみがゝず我より外に人なしと世間知らずの高枕、暴君汚吏の意にまかせ下を抑へし悪政の天罰遁ゝところなく頃は天保十二年「英吉利国」と不和を起し唯一戦に打負て和睦願ひし償（つぐない）は洋銀二千一百万、五処の港をうち開きなをも懲ざる無智の民、理もな

きことに兵端を妄に開く弱兵は負て戦ひまた負て今の姿に成行しその有様ぞ憐なり」[90]

礼儀の国として知られた古い文明国が、進歩とは逆に退歩し、専政と自己満足的なエスノセントリズムのゆえに、西洋諸国に理のない争いを起して「天罰」の敗北を重ねる。これは、一九世紀中葉以降英米に広がった中国像のステロタイプを反映していた。『世界国尽』のこの部分は、挿絵にいたるまで、福沢が西洋で入手した「パーレー」の……万国史」(*Universal History on the Basis of Geography*)や「亜版「ミッチェル」地理書」(*Mitchell's School Geography*, 1866)に拠っていた。さらに、『世界国盡』附録には、ミッチェルの地理学教科書を忠実になぞった世界史像が記されていた。それは、歴史を「渾沌」、「蛮野」、「未開」、「文明開化」の四つの段階を順次通過する単線的な進歩としてとらえ、その上でこの四段階を同時代の世界の五大洲に分布する五つの人種に対応させていた。その意味で文明の進歩の時間と五人種の空間的分布とが一致していた。それはおそらく、あるいは東まわりで世界を一周し、あるいはエジプト経由でヨーロッパに往復した人々の経験に強く訴えるものだった。

最後に内田正雄の『輿地誌略』（一八七〇年より刊行）。『世界国盡』の翌明治三年から刊行され、全十二巻（第十巻以降は西村茂樹によって完成）に及ぶ本書は、『世界国盡』に比べてはるかに本格的な学術書だった。そのようなものとしてこの本は、福沢の『西洋事情』、中村敬宇の『西国立志編』とともに、明治の三書と称され、新しい世界像を同時代に広める上で大きな役割を果した。『世界国盡』に比べて本書では世界像ははるかに体系的に展開され、その中の中国像もより詳しくなっていた「支那（チャイナ）」は次のように描かれていた。

「国民ノ作業ニ於ケル往時ヨリ文化開ケ器械工織等ハ西洋ニ先チ隆盛ナル所ナリ又書籍ヲ印行シ及び磁石ヲ用フル事業ノ如キ欧羅巴ヨリ遙カニ先ツテ之ヲ發明セリト云フ……国民ハ耕作、蚕業、販売、漁樵ヲ勤メ殊ニ文学ヲ貴重シ勉励シテ之ヲ講習ス故ニ経史詩文ニ通シ文字ヲ知ル者ヲ君子ト稱シテ尊敬シ文學有ル者ヲ撰挙シテ之ニ官ヲ授ク且風俗古ヨリ禮讓ヲ重ズト

雖モ徒ニ虚飾ノ末ヲ趁(お)フテ細禮ニ区々トシ加之数千年来君主専治ノ政令ニ基キ下民ヲ駕御スルガ故ニ、開化ノ風教世ヲ追テ逡巡シ、国民ノ智覚モ亦随テ消滅ス。且其民情一般ニ詭詐狡黠ニシテ頑固俗ヲ爲シ、罪人随テ多ク、残忍ノ風習言フニ忍ビザル者アリ、又古ヲ貴ミ今ヲ賤ミ、自ラ尊大ニシテ中華中国ト称シ、外国ヲ視ル夷狄禽獣ノ如ク、屢信義ヲ外国ニ失ヒ、其汚辱ヲ蒙ルト雖モ、依然トシテ旧習ヲ固守シ、海外ノ形勢ヲ察シテ自ラ一変スルヲ知ラズ。故ニ国勢振ハズ政令行ハレズシテ、数千年前ノ開化ノ域ニ止リ、進歩セザルノミナラズ、次第ニ却歩シテ、其人情陋風俗ノ日日ニ衰頽スルヲ見ル○支那人ハ風俗賤陋ナリト雖モ其善ク労苦ニ堪フルヲ以テ洋人之ヲ雇テ奴隷トシ東洋諸邦一般ニ之ヲ使役スル者多シ又印度地方ニ於テ支那人ノ遷居シテ市街ヲ為スモノ夥シ[91]」。

中華思想に対するイデオロギー暴露という、『輿地誌略』における中国論の基調は、『世界国盡』のそれと共通している。さらに『世界国盡』には見られなかった、中国人がアジア各地で西洋人に「奴隷」として雇用されているという記述は、西力東漸の跡をたどって西洋に赴いた者の深刻な記憶を喚び起しただろう。また中国の古い文明が「却歩」して西洋文明と先後逆転するにいたったという歴史の總括もまた、中華と夷狄＝西洋とが所をかえる経験をした者の歴史感覚に訴えただろう。『輿地誌略』の中国の部は、主として「ウエルス、ウリヤム氏ノ支那国誌」—Sammuel Wells Williams, *The Middle Kingdom; a Survey of the Geography, Government, Education, Social Life, Arts, Religion & C. of the Chinese Empire and its Inhabitants* 2vols., New York and London, 1848 に拠っていた。ウィリアムス（一八一二—一八八四）は、アメリカン・ボードの宣教師として長く中国で活躍した、米国のもっともすぐれたミッショナリ・シノローグで、*The Middle Kingdom* は、このような中国在住の経験をもとにした百科全書的な大著であり、一九世紀を通じて英語による最も権威ある中国研究書として、英国のF・デヴィスの *The Chinese* と双璧をなしていた。

そして『輿地誌略』もまた、『世界国盡』と同様に、世界歴史を四段階を経過する単線的な進歩としてとらえていた。中国はペルシアやトルコとともに「半開（ハーフシヴィライスト）」段階に配当されていた。半開の民においては

「農工商等ノ業共ニ行ハレ技藝文字ヲ講習シ他國ト貿易ヲ營ミ品物ヲ製シ土産ヲ出シ礦山ヲ開クヲ知リ且禮義ヲ重スル風習有リ未開ノ民ニ比スレハ其開化遙カニ高等ノ域ニ進ミシ民種トス支那、比耳西亞（ペルシア）、土耳其（マヽ）等ノ如キ是ナリ然レトモ半開ノ人民ノ固有スル習俗ハ皆古ヲ貴ビ更ニ開化ニ進歩スルヲ希ハズ必ズ其自國ヲ以テ第一トシ他國ヲ以テ夷狄ト名ケ己ニ勝ル事アリト雖トモ之ニ倣フ事ヲ知ラス貴族ハ平民ヲ蔑視シ男ハ女ヲ卑ミ人情ニ戻ル少ナカラズ理學ヲ講窮セズ虚誕ニ惑溺シ知識乏シク器械粗ニシテ無益ノ人力ヲ勞シ虚飾ヲ貴ビ事情ニ遠ク人情交際其陽ハ温厚ナレドモ其陰ニハ残忍ナルモノ多ク都テ古來傳受ノ儀式体裁ノ外切實ナル事ヲ知ラズ又半開ノ民ニ於テ一般ナル事ハ君主政府ニ於テ專ラ威權ヲ擁シ國民之ニ參與スルヲ得ズ是文明開化ノ民ト大ニ區別有ル所以ナリ」[92]

先に見たような中国についての記述は、「半開ノ民」についてのこうした総論的な記述（巻一）を敷衍する体裁になっていたのである。

そのような世界歴史＝地理書として、広く全国各地で教科書に採用された『輿地誌略』は、三宅雪嶺によれば、「識らず知らず支那を輕んじ歐米を重んじ、壓制を憎惡し自由を尊重するの風潮を高むるにも與かる」[93]役割を演じたのである。

『世界国盡』や『輿地誌略』は、幕末に西洋・中国複合経験の衝撃をくぐった人自身の、世界像とその中に位置をしめる中国の像との転換を總括し理論化するとともに、学校の教科書としてベスト・セラーとして広く読まれることによって、そのような世界像の転換を同時代全体にうながすものだった。中華夷狄的世界像は文明の単線的進歩の諸段階という世界史像にとってかわられた。中国は文明世界の頂上から「半開」段階に引きおろされ、逆に西洋世界は夷狄から文明へと上昇した。西洋の文明世界と「半開」の中国世界とはあらゆる面で対照的に描かれていた。開かれた社会と閉じた社会、進歩と停滞、改革と尚古、自由と専制、等々。

Ⅳ　むすびにかえて

一八五八（安政五）年に米国をはじめ西洋諸国と修好通商條約を結び、一八六〇（万延元）年に批准交換の使節を米国に送ってから、一八七一（明治四）年、日清修好条規によって中国との間に新しい国交を樹立するまで、西欧型国際関係に編入された日本と西洋諸国との交渉が活発化する一方で、隣邦中国との関係は、古くからの「通商」の関係にとどまり、西洋諸国との交渉の華々しさに比べれば影が薄かった。従って研究史においてもまた、西洋との交渉についての研究が光をあびているのに反し、研究はほとんど一八六二（文久二）年の千歳丸上海派遣にかぎられ、質量ともに貧しい。この一〇年余の日中関係はそうした二重の意味で薄明状態にあるといえよう。しかし、日本の中国像はこの間に大きな変容を始めていた。この時期は日本の中国像、中国に対する態度における大きな暗転の時期だったのである。

この時期を通じる日本と西洋世界および中国との関係は、いわば三角関係をなしていた。日本は、西洋世界との政治的経済的接衝でも文化接触でも、中国の阿片戦争からアロウ戦争にいたる敗北という経験の「殷鑑」と、中国産の西洋世界への手引書―その多くが中国在住の西洋宣教師の活動の産物だった―とによって予め準備することが出来た。逆に日本の西洋「探索」行は、その全行程にわたって、さまざまな形で中国を知る旅でもあった。この時期を通じ、日本にとって中国との直接接触とともに――おそらくそれ以上に――西洋行の中で中国に接する経験、小論でいう西洋・中国複合経験が大きな意味をもっていた。日中交渉には、西洋が深く介入していた、あるいは日中交渉は西洋によって媒介されていたといえよう。そのような歴史的背景のもとでの中国像の変容過程と新しい中国像とは、どのような特徴をもっていたか――どこで何をどのような文脈で見聞したか。そのような経験をどのように解釈したか。二つの面から検討してむすびとしたい。

1．西洋に赴く日本人が見聞したのは、第一に、巨大かつ多様で、急激に変りつつある中国の、ごく限られた、また特殊な一部分だった。彼らが中国で訪れたのは広大な大陸のうちの沿海地帯の開港地と西洋の植民地とにとどまった。第二にそれは、中国社会のもっとも悲惨な部分だった。第三にそれは、西洋世界にとりこまれ、あるいは西洋世界と対照をなしていた。條約港上海は、絶え間ない戦乱のおびただしい難民が吸収能力をこえて流入した旧中国の暗黒面だったこと、しかもそれは、西洋租界の西洋の力と富を威圧的に誇示する植民地文化とむきあい、それにとりこまれようとしていたことは、これまでに見たとおりである。英国直轄植民地香港も、東南アジア各地の華人社会も、西洋行の便船という小社会も、これのバリエーションだったといえよう。幕府や諸藩の公式使節は云うまでもなく、有志として西洋に赴いた者も一方では中国社会の最暗黒面に接し、他方では西洋人によって西洋文明のショウ・ケース的な部分を引きまわされた。彼らが西欧で、初めて目のあたりにした孔子の聖像、皇帝の錦衣、経子史集の典籍等は、中国文明の精髄だった。しかしそれらもまた、西洋が掠奪した戦利品であるか、西洋のすぐれた学問の対象としていわば知的に領略されたものだった。それらは、あるいは軍事力によってあるいは知的力によって支配され、西洋世界の中にとりこまれていたのである。

2．巨大複雑で急激に変化しつつある中国の中で日本人たちが経験したこのような事実について、次の問題は、彼らがそれをどのように解釈しどのように意味づけたかである。異なる社会に初めて接した者は、しばしば、その経験が初めてであり、線や面ではなく点のように限られたものであればあるだけ、強い新鮮な感動を受け、それをその社会全体のことに一般化しようとする。その国との接触が旅行者型から視察者型へ、さらに滞在者型、生活者型へと深まり、その社会の経験がいわば点から線へ、さらに面へと広がるにつれて、そのような感動に動かされた短絡的な一般化は影を薄めて、その社会の多様さ複雑さがより深くとらえるようになる(94)。西洋・中国複合経験の場合もそうだった。たとえば一

八六五（慶応三）年、上海・香港経由でパリに向った徳川昭武一行の随員渋沢栄一の場合。上海について。

「上海は……西洋諸國商人の出店も多くあれバいと賑はしき土地なれとも支那從來の街衢は狭隘ニ而甚汚穢を究む就中上海城といふ城中の市街は酒肆肉舗の類の多けれバ臭氣堪難し土人は陋劣ニ而然も浮薄の体あり非人乞食の類多し本邦の政態も一斑を見て推計るへきを覺ふ」[95]

上海に次いで香港に寄港するとそこでも対象こそ異れ、同じような反応が現れる。渋沢は英国の刑務所に案内された印象を次のように記す。

「英国獄舎の宏壮に而行届ける様且其罪人に各其業を営ましむる處置等の遺漏なきに一同感し入りぬ其一端を見ても本国の富強なる推て知るべし」[96]

経験や情報をどのように解釈し意味づけるかという問題にはさらに、経験や情報の通路・メディアの役割が関連する。西洋行の途中で中国経験をした人々は、中国を経験する場合にも、西洋人に手引きされ、西洋の側から近づいた。上海を訪れた人々は、西洋諸国の船にのり、西洋の租界に宿をとってそこから県城を訪れ、道台を訪問するにも西洋の外交官や商人に案内され、彼らから説明を聞いた。先に見た、オランダ公使の説明によって中国の政治動向を予測し、西洋諸国にあやかった砲艦政策による開国要求を構想した、杉浦譲の意見書は、そのような中国理解の極みと言えよう。また彼らが西洋本国で接した新聞の中国報道、とくに外交官の中国情報は、日本の中国との接触ではえられないような、最新で、清朝支配層の内部までふみこんだ、包括的なものだった。しかし、その場合、たとえば、一八六〇年の英仏連合軍の天津・北京進攻、咸豊帝蒙塵という事変についても、あるいは、一八六二年の太平天国軍の寧波占領に対する反攻を転機とした、英・仏両国の内戦への軍事介入についても、事態はもっぱら西洋側の立場にしたがって解釈されていた。日本人たちはパリやロンドンの各所で、中国からの戦利品に接していながら英・仏軍による円明園の破壊掠奪を頂

点とする各地での蛮行について聞いた様子はうかがわれない。日本人たちの中国の事物、中国についてのさまざまな経験や情報は、彼らに強い印象を与えたが、それら自体は、それぞれの現地やそれぞれの時点での、断片的なものだった。それを解釈し意味づける引照基準は、もっぱら西洋のそれに依存していたのである。

こうした、点のような中国経験を一つの中国像に統合する上で大きな意味をもったのが、『世界国盡』や『輿地誌略』に世界像構成のパラダイムを提供した、文明進歩の単線的発展段階という、西洋世界ことに英米両国を風靡した世界歴史＝地理論だった。この理論は西洋は全世界を貫く進歩の頂上であるという自己意識をもとにして、その文明の高みから全世界の諸国民、諸地域を俯観し、それらを包括し整序する歴史＝地理論だった[97]。中国と日本を軸とした伝統的な世界像が破れ、西洋中心の新しい世界の中に引きずりこまれて混迷する日本人たちを、この新しい世界像は、彼らの新しいしかし混沌たる経験を整序し統合する巨大理論（グランド・セオリー）として、強くとらえた。そしてそのことはとりもなおさず、西洋の視座からの中国像・中国理解を、西洋にとりこまれた中国を見聞した人々の心に深く植えつけるにいたったのである。

西洋行の旅の中で中国を知った人々は、強烈な直接経験と、その経験を理解しまとめるのを助ける西洋産の手引きにうながされて、中国像を急速に変えるにいたった。しかし、新しい中国像は、これまでに見たようなその形成過程の特質からして、さまざまな面で、中国の現実から乖離していた。それは巨大かつ複雑で変化しつつある中国のきわめて限られた一面をとらえるにすぎなかったし、西洋の知的圧力をくぐることによって、ゆがみを帯びていた。従って中国のある面を鮮明にあるいは拡大してとらえるとともに、他の面を見落すにいたった。ごく簡単にいえば、西洋＝中国複合経験を通じてえられた中国像には、地理的にも社会構造の面でも中国の内部がほとんどとらえられていなかった。そして、西洋＝進歩対中国＝停滞ないし退歩という世界像に制約されて、中国内部に起りつつある変化と新しい動きを充分に理解しえなかった。

一八六〇年から七一年は、アロウ戦争における英仏連合軍の北京占領、咸豊帝蒙塵の政治的危機、そして同治の中興が始められ終焉するまでの、清朝支配が動揺する激動期だった。この間に上海や香港とその周辺を基盤に洋務運動が展開し、洋務派さらに早期改革派が新しい勢力として抬頭しつつあった。西洋への往復の途上上海や香港に立ち寄った日本人たちは、ごく短かい滞在の内にもこうした動きの現われにある程度接してはいた。しかし、接した事実の底にこのような大きな新しい動きが始まっていることまではほとんど知ることが出来なかった。自己の他国についての像がその現実から乖離している場合、それを自覚しえずにその国に働きかければ、その国の現実から抵抗をうけるだろう。しかし、それでもなお、自己の他国理解と現実とのずれを自覚しえず、他国に対して働きかけるならばそれは時に、相手に強制を加えてでも、相手国についての自己の像に近い現実を作り出そうとするだろう。日清修好条規締結の交渉過程とそれ以降の日本の対中国政策の展開には、このような問題が現われているように思われる。

これまでに概観したように、日中交渉の薄明の時期、西洋・中国・日本の文化接触の三角関係を背景にして、日本人にとっての西洋・中国複合経験という独特な中国経験が生れ、その中で新しいしかしゆがんだ中国像が生れた。このような中国経験と中国像は、日本が帝国として確立し、清帝国が中華民国に変っても、一九三〇年代の終りまで再生産され続けた。このような特異な中国経験を生み出す交通路が帝国日本の社会制度の中に組みこまれて確立し、その背景のもとで、西洋・中国複合経験とそれに結びついた中国像の形成とは、さまざまに様相を変えながらも持続したのである。いうまでもなく、中国との国交の樹立によって日本から中国への渡航・旅行・居住はふえた。しかしそれをはるかに上まわる勢で日本から西洋世界へのそれも発展した。帝国日本のエリート層にとって西洋に渡る道と中国への道とが分れ、西洋に渡る者は中国を訪ねることなく、中国に赴く者はその逆という傾向が支配的になった。前の道はエリートとして

の上昇の表街道に、後者は裏街道になっていたことはよく知られるとおりである。

その表街道の中心は、一方で北米横断鉄道他方でシベリア鉄道が開通した後もなお、上海・香港経由でヨーロッパに向うコースだった。この航路は、多くの日本人にとって、日本社会各界のエリートとして社会的に上昇するコースを意味するようになった。この航路によってヨーロッパに向うエリートたちに中国研究や対中外交・貿易の専門家は少なかった。多くの人々は、中国についてはアマチュアだったが、それにもかかわらず彼らが西洋世界を経験して、日本社会の中で出世をしたがゆえに、彼らが西洋行の中でえた中国経験と中国観とは、日本社会の中で大きな影響をもつにいたった。一九二〇年代から一九四〇年代にかけてのその著しい例を一瞥して、小論のむすびとしたい。

一九二七（昭和二）年二月、京都帝国大学助教授和辻哲郎は、文部省在外研究員として、道徳思想史研究のため、日本郵船白山丸の客となってドイツに向った。約四〇日の航海の船中からの見聞がきっかけになって一九三五（昭和一〇）年の名著『風土』に結実したことは、周知のとおりである。ようやく形をとり始めた『風土』の構想が雑誌『思想』に次々に発表された時、第一回掲載の基礎理論の考察に続いて発表された、第二回各論編の最初は、「支那人の特性」と題されていた。それは『思想』一九二九（昭和四）年七月号、小川琢治をはじめ各分野の中国研究専門家を集めた「特輯支那号」に巻頭論文として掲載されたのである。この部分は単行本『風土』がまとめられるに当って、「モンスーン的風土の特殊形態」の二類型の一つとして日本と並ぶ位置にすえられた上、一九四四（昭和一九）年の第一二刷に当っては、全巻でただ一箇所の大きな改訂を施され、一九四九（昭和二四）年の第一三刷に際してもふたたび改訂された。これらの事実だけからも、和辻の「ヨーロッパ土産[98]」としての『風土』における中国論が紙数の割合は小さいにもかかわらず和辻自身にとっても知識人の世界においても、大きな意味をもち、かつ同時代の現実と深くふれあっていたことがうかがわれよう。ここでは原型「支那人の特性」について、小論の主題との関連について、その特質を見ておきたい。

「支那人の特性」の冒頭は次の一節で始められる。

「自分の瞥見した支那は、上海、香港、シンガポーアなどの支那である。それらは最近一世紀足らずの間に歐米の資本主義が作り上げた歐米人の町であって、支那固有の町ではない。しかもその「支那固有でない」町に於てちやうど「支那固有なもの」が最もあらはに現はれてゐる。一歩を進めて云へば支那固有でないこの種の國際的都市が支那の國土に支那の町として出現したといふちやうどそのことが最も著しく支那的なのである[99]」。（傍点原文）

和辻哲郎は、ヨーロッパ航路の定期船でこの年の二月二一日朝上海に到着した。一八六〇年代初めに日本人が寄港した上海が太平天国軍の重圧下にあえいでいたように、一九二七年、軍閥支配下の上海は国民党北伐軍の接近に脅え、その上内部からは周恩来指導下の共産党に組織された労働者の蜂起が危惧されていた。現に和辻が乗った白山丸はストライキのため出港がおくれて二日間寄港の予定が一日のび、そのため次の寄港地香港での日程は夜入港して翌日正午出帆というあわただしいものに切りつめられたのである。彼の中国本土見聞はこの間の船上からの観察と上海で一日、香港で二回の短い上陸が全てだった。けれどもその反面、和辻の場合にも、大英博物館で顧愷之の画巻（実は唐代の模本だが）の繊細にうたれ[100]、パリでも、ギメ美術館でシャヴァンヌやペリオがもたらした敦煌の仏像・仏画を始めとする仏教美術に対面し[101]、国立図書館で敦煌の写真を見る[102]など、西欧帝国主義諸国の本国に集められた中国美術の精粋に接したのだった。

このような見聞を通して和辻は、「支那固有なもの」――欧米の政治的権力や武力の支配下においても「実に頑固に支那人である」その特質――を彼得意の「直観」によってとらえる。それは無政無法の自然状態に近い「物情騒然」の中でも全く感情を動かすことがない「無感動」であり、「無感動」の反面は、あくことを知らぬしたたかな「金銭追求」である。中国の民衆は「無感動的で利益の前に生命を賭し得る民衆[103]」である。したがって和辻は、彼が上海で目のあた

りにした反帝国主義運動も国民党の革命運動も、その本質は金もうけのための商売だと断じる。

「旗印としてはさまざまの新しい標語が用ゐられるが、然し例へば打倒帝國主義を掲げる日貨排斥は、レーニンの意味での資本主義最後の段階を倒壊せしめようといふ如き運動では決してなく、日貨販賣に際して幾割かのコンミッションをせしめようとする一つの職業に他ならない。それは暴力の示威の下に行はれる點で、昔の諸侯が山上に城を構へ下を通る商隊から高い關税を取ったのと變りはない。政治家が民衆をひきゐて三民主義の下に社會主義的革命を行ふというのも、實は一つの資本家的企業である。何故ならばこの革命の主勢力たる民衆は、資本主義打倒のために結合したものでは決してなく、ただその勞銀のために雇はれた労働者に他ならぬからである。彼らがその勞働のために用ゐる機械は銃砲彈藥である。[104]」（傍点原文）

このような中国人の「無感動的な性格」を作ったのは、一つには中国の「無政府的な社会の情勢」であり、さらにはその「国土」だった。中国の「国土」は「茫漠たる大陸」である。泥水を吐く楊子江、「茫々たる泥海」、大平野、それら全てが与える印象は偉大さではなくしてただ単調と空漠とである。このような「特殊な風土的負荷」からして始めて「無感動的な人間生活」は理解されうるのである。

そして「支那人の特性」は、日中双方の国民性の対比と両者抗争の見通しでもって結ばれる。

「か、る性格の相違を我々は輕視してはならない。支那人は生活の藝術化を全然解せざる實際的國民であり、日本人は生活の藝術化をやり過ぎる非實際的國民である。その點に於て支那人は猶太人よりももつと猶太人的であり、それに反して日本人は、ギリシア人よりももつとギリシア人的である。日本人がその團結を失つて個人の立場に於て支那人と對するならば、日本人は到底支那人の敵でない。さうして支那人が勝つといふことは、人間性にとつては一つの退歩である。[105]」

この「支那人の特性」を表題を変えただけで収めた『風土』は、一九三五（昭和一〇）年から四四年までに一二刷を重ねた。第一二刷において「支那」の節だけに大改訂が施された。「事、風土に関する限り、直観ははなはだ大切なのである。[106]」という和辻は、これまでのもっぱら直観にもとづいた中国論を補うために中国研究書も（ただし、おそらく一

冊だけ）参照した。そして、直接に見聞した上海・香港・シンガポール・ペナンと楊子江下流以外の地域についても、両漢より唐宋に至る間の繊細にしてきめ細かい芸術[107]への注目からして、その母胎としての黄河文化圏の「黄河的風土」に初めて、簡単に論及した。日中両国の国民性を対照して中国人が日本人に勝つのは「人間にとっては一つの退歩である」とした初出の結論も大巾に改められた。

「日本の文化は、先奏より漢唐宋に至るまでのシナ文化の粋をおのれの内に生かしているのである。シナ人はこれを理解することによってかえって現代のシナに消失している過去の高貴な文化の偉大な力を再認し得るであろう。そうして現在行き詰まっているシナ的性格の打開の道をそこに見いだすこともできるであろう。

シナは復活しなくてはならぬ。漢や唐におけるごとき文化の偉大さを回復しなくてはならぬ。世界の文化の新しい進展にとってはシナの文化復興は必要である。徹底的に外国の植民地に化する方針を固執するごとき財閥軍閥たちは、シナ民族自身の敵に過ぎない。シナ民族はまず自らの足場に立たなくしてはならない。そこに偉大なるシナの復活が始まる[108]。」

和辻は、中国は中国自身からは失われて久しいが、日本文化の中に今日まで保存されている中国文化の粋を、日本から学ぶことによって、中国の「文化復興」「偉大なるシナの復活」を、と訴えたのだろう。それは同時代の東亜協同体論や大東亜共栄圏の文化理論にも共鳴するものだった。

初出「支那人の特性」から改訂を経てその後にいたる和辻の中国の国民性論には「イデエを観る目」と評された彼の直観への強い自信とそれを裏付けるだけの鋭い把握能力があきらかである。反面、そのような直観も、それを制約する條件への自覚を欠く時、人をあざむくことがいかに大きいかもまた著しい。和辻もまた上海、香港、シンガポール、ペナンを通して中国を「瞥見」した。それらの都市の性格についての彼の理解は、一八六〇年の西洋行の日本人に比べれば格段に深くなっていた。しかしそれでも、西洋優位の西洋・中国・日本の三角関係の文化接触の中で西洋と中国を経験をするという條件は、基本的な構造において一八六〇年代から持続していた。彼の明快な中国像も一八六〇年代のそ

れに、形成のプロセスにおいても内容においても、通じるものだった。そしてこのような中国論が中国研究の専門家からも批判を受けることなく、版を重ねたという事実の中に[19]、このような中国論に共鳴する読者層の存在と、このような中国論の影響の大きさとを見ることが出来るのである。

註

本稿で前編とあるのは第三八巻五・六合併号掲載の（一）をさす。

（1）渋沢栄一「航西日記」『日本史籍協会叢書・渋沢栄一滞仏日記』（東京大学出版会・一九六七年）七五頁。

（2）文久二年閏八月九日付、柴田貞太郎書簡、『日本史籍協会叢書・夷匪入港録一』（東京大学出版会・一九六七年）二五六―二五七頁。『夷匪入港録』には、発信者、宛先とも記されていないが、発信者は、外国奉行支配組頭、柴田貞太郎である。

（3）「仏蘭巴里府より一ト先帰府仕候趣意柄申上候書付」、維新史学会編『幕末維新外交史料集成』第六巻（財政経済学会・一九四四年）一三五、一四六―一五八頁。

（4）渋沢「前掲」（注1）一一七頁。

（5）ロニとこの時期に渡欧した日本人との交渉については、松原秀一「レオン・ド・ロニ略伝」慶応義塾福澤研究センター『近代日本研究　3』、一九八六年、に詳しい。

（6）柴田貞太郎書簡「前掲」（注2）二五五頁。

（7）英仏海軍の寧波攻撃について、日本人たちがサンクト・ペテルブルグで聞いた情報もこれと同じようなストーリーだった。本文一五頁を参照。

（8）名倉敦・高橋包「航海日録　巻二」（京都大学文学部蔵写本）元治元年三月二十一日の條。パリの動物園で、「唐人ノ蛮婦ニ従テ俳徊スルヲ見」、筆談をかわして、その「唐人」が、名は丁敦齢、山西の人であることを記している。なお、この「航海日録」のほか京都大学文学部所蔵の名倉予何人手記諸編の写本の閲覧については、松尾尊兊氏の細大にわたる援助におう。記して感謝する。

(9) 市川渡「尾蠅欧行漫録」『日本史籍協会叢書・遣外使節日記纂輯二』（東京大学出版会・一九七一年、以下KSIIと略す）三六五頁。
(10)「前掲」（注8）元治元年四月一日の條。
(11) 佐原盛純「航海日録」（会津若松市立会津図書館蔵自筆稿本）元治元年四月二一日の條。
(12) 同前（注8）元治元年四月二一日の條。
(13) 一八世紀までのフランスにおける、中国文明の受容と中国観について、後藤末雄『中国思想のフランス西漸』1・2（平凡社・一九六九年）を参照。
(14) 杉浦愛蔵「奉使日記」、土屋喬雄他編『杉浦譲全集・第一巻』（同刊行会・一九七八年）一五三頁。アンヴァリド廃兵院の軍事博物館か。
(15)「前掲」（注11）元治元年三月三〇日の條。
(16)「前掲」（注14）一五三頁。
(17)「前掲」（注11）元治元年三月三〇日の條。
(18)(19)「前掲」（注14）一五七―一五八頁、元治元年四月一九日の條。
(20) この時期の、日本人の西洋行に大きな意味をもった、一八六七年のパリ万博について、松田清「フランスからみた文明開化」林屋辰三郎編『文明開化の研究』岩波書店、一九七九年。また万博の歴史の概観として、吉田光邦『改訂版・万国博覧会』日本放送出版協会、一九八五年を参照。
(21)「前掲」（注1）八一―八二頁。
(22) 同前、八一頁。
(23) 拙稿「解説」『福沢諭吉選集』第一巻（岩波書店・一九八〇年）二七九頁参照。
(24) 文久二年六月七日付、佐野鼎より手塚律蔵宛書簡、「前掲」（注2）『夷匪入港録一』二四〇―二四一頁。『夷匪入港録一』にはこの書簡の宛先が記されていないが、市立金沢図書館蔵「佐野鼎欧行通信等」によって手塚律蔵宛であることがわかる。この点谷澤尚一氏の御教示による。
(25) 高島祐啓「欧西紀行巻二十」（国立国会図書館蔵写本）。

(26) 文久二年四月晦日付高島祐啓書簡。「欧西記行巻二十」に合冊された。高島の旅先からの書簡の写しを集めた「浪のおとづれ」に収められている。

(27) 文久三年四月一日付、福沢諭吉の大槻磐渓宛書簡。『福沢諭吉全集』一七巻（岩波書店・一九六一年、以下、FZ17のように略す）一四頁。

(28) (29) (30) 福沢「西航記」FZ19・五二頁。

(31) 「支那分割今更驚くに足らず」『時事新報』一九八九年一月一三日、FZ16二〇九―二一〇頁。なお、この他『時事小言』FZ5一八五頁、「維新以来世界の大勢」『時事新報』一八九四年三月一日FZ14二九四頁、「今回の恩賜に付福澤先生の所感」『時事新報』一九〇〇年五月一六日FZ16六〇一―六〇二頁にも、少しづつニュアンスの異なる回想が記されている。

(32) 「前掲」（注31）「支那分割今更驚くに足らず」二一一頁。

(33) 同前二一〇頁。福沢はこのようにのべているが、実は、中国の「開国以来殆んど百有余年」の間に、広東・上海・香港を中心に、「眞実洋書を読み其意味に通」じ、「西洋の地理歴史を解する」知識人層が現われつつあった。彼らは、福沢が唐学塤との談話についての一連の回想の中で指摘するように、中国の伝統の厚い壁に阻まれて、中国社会の周縁より内部に食い込むことが難しかったのは事実である。しかし「十一人」という数がどうして出て来たかは不明だが、彼らの数がそのような少数にとどまらなかったことも明らかである。事実、『海国図誌』を始め、日本に輸入されて広く読まれた西洋書の中国語への訳編は彼らによってなされたし、西欧の宣教師・実務家が行なった中国の書物の西洋語への翻訳、中国語による著述も彼らの協力によってはじめて可能になった。香港英華書院の王韜はその著しい例である。西洋に赴いた日本人のうち漢学派知識人は、西洋語を解しないため、西洋書の中国語訳や西洋人の中国語著作に親しんだがゆえに、上海や香港の西洋人の学校や出版社を熱心に訪ねて、王韜のような新らしいタイプの中国知識人に出会うことになった。それに反し福沢ら洋学派知識人の場合には、おそらく西洋語に通じていたがゆえに、こうした著作に親しんだ様子もその出版元を訪ねたあとも見られない。もし洋学派知識人の福沢に、非洋学派知識人のような関心があって、王韜のような知識人と、唐学塤と交したような日中両国の改革についての意見を交すことがあったら、引用のような福沢の見方はかなり違ったものになったのではないかというのが、小論の主題からする関心である。

(34) 市川渡「前掲」（注9）三五〇頁。

(35)(36) 拙稿「『西国立志編』と『自由之理』の世界」日本政治学会編『日本における西欧政治思想』(岩波書店・一九七五年) 一四頁。

(37) ヴィクトリア期英国の世界像の表現としてのロンドン万博について、東田雅博「ヴィクトリア期英国における世界観——万博と文化帝国主義——」『史学研究』第一七〇号・一九八六年を参照。

(38)「前掲」(注9) 三六七頁。全文の写しは三九三—三九八頁に収められている。万延元年遣米使節団のメンバーも、香港でこの布告を知って全文を写している。玉虫誼茂「航米日録　巻八」、沼田次郎・松沢弘陽校注『西洋見聞集』(岩波書店・一九七四年) 二四九—二五一頁。なおこの布告の同定については、三石善吉氏の教示による所が大きい。

(39)(40)(41) 中井桜洲『西洋紀行航海新説』明治二年、『明治文化全集　外国文化編』(日本評論社・一九六八年) 二九三頁。

(42) 同前、二九五頁。

(43) 同前、二九三頁。

(44) 渕辺徳蔵「欧行日記」『日本史籍協会叢書・遣外使節日記纂輯　三』(東京大学出版会・一九七一年) 五六頁。

(45)「前掲」(注9) 四〇七頁。

(46) 同前、四〇八頁。

(47) 同前、三九一頁。

(48) 渕辺徳蔵「前掲」(注44) 九五—九六頁。

(49)「前掲」(注28) FZ19四七頁。

(50) 文久二年八月二一日付松木弘安の川本幸民あて書翰「前掲」(注2)『夷匪入港録』(一)二四七—二四八頁。『夷匪入港録』にはこの書簡の宛先は記されていないが、川本幸民宛である。

(51)～(55) 上田友輔「俄羅斯記」(神戸大学附属図書館蔵写本) この写本の閲読については、宮沢節生氏に援助いただいた。

(56) 帝政ロシアにおける中国研究については、ウェ・バルトリド・外務省調査部訳『欧洲殊に露西亜における東洋研究史』外務省・一九三七年、三八四—八八、五三〇—三三頁および吉田金一『近代露清関係史』近藤出版社、一九七四年、二一〇—二一〇九頁を参照。

(57) Donald F. Lachman, *Asia in the Making of Europe*, Vols. 1 and 2, University of Chicago Press, 1965-1978. の表題をかりた。

この本は一六―一八世紀にかけて、ヨーロッパの形成の上にアジアが与えたインパクトの全容を明らかにするという壮大な構想で進められたが、当初の全三巻の計画の中、第二巻まで五冊計二〇〇〇頁を費して、一五世紀以前の前史から出発して一六世紀末まで到達したところで刊行がとまっている。本書はそのように対象とする時期が限られており、また、現在「オリエンタリズム」として批判されているような視点の偏りを免れていない。しかしヨーロッパの形成に与えたアジアの創造的なインパクトとヨーロッパの自己相対化の歴史をさぐるという関心、何より、科学・文学などの著述だけでなく、ヨーロッパ各地にわたる数多くのアジアの文物の蒐集や建築などについての徹底的な調査にもとづく百科全書的な記述は日本人が、ヨーロッパに吸収されたアジア・中国に、ヨーロッパで出会うという小論の関心にとっては示唆に富む。日本語文献でこの本に近いものとしては、榎一雄編『東亜文明の交流・第五巻・西欧文明と東アジア』（平凡社・一九七一年）をあげられるにとどまる。

(58) 村田文夫『西洋見聞録』明治二年序『明治文化全集　外国文化編』（日本評論社・一九六八年）一九二頁、原漢文。

(59) 慶応元年一〇月一二日付、桂久武宛書簡、日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第四巻（東洋経済新報社・一九七四年）五八頁。

(60) 公爵島津家編輯所編『薩藩海軍史』中巻（同史刊行会・一九二八年）八六六―八九〇頁。

(61) 建言ケ條草稿「前掲」（注59）『五代友厚伝記資料』第四巻、五四―五五頁。

(62) 岩　松太郎「航海日記」元治元年六月一九日の條。（「前掲」（注9）『遣外使節日記纂輯　三』）四七七頁。

(63) 同前、六月四日の條。四六七頁。

(64) 北海道庁『新撰北海道史』第三巻、一九三七年、三三九頁。

(65) 同前、三三八―三三九頁。

(66) この中国人労働者雇傭の始終については、大庭幸生「産業と外国人」札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫19お庸い外国人』（札幌市教育委員会、一九八一年）九二、九七頁に詳しい。なお、明治新政権成立直後の、開拓使を含む清国貿易・市場調査等の政策全般について『大隈文書』第四巻（早稲田大学社会科学研究所・一九六一年）文書七―九、一三、一九、二三、二五とその解説を参照。

(67) (68) (69) 杉浦愛蔵ほか「支那与御条約御取結方手続承り糾候始末覚書」慶応元年四月、「前掲」（注14）『杉浦譲全集』

第一巻一九六頁。

(70) 同前、一九七頁。

(71)「航米日録」巻八、沼田次郎・松沢弘陽「前掲」(注38) 二二九―二三一頁。

(72) 名倉　敦・高橋　包『航海外日録拾遺　筆話』(京都大学文学部蔵写本) 甲子正月初八日の條。

(73) (74) 名倉・高橋「前掲」(注8) 巻之二、元治元年五月初四日の條。

(75) 日清修好條規締結交渉については、戦前の田保橋潔の先駆的な研究「日支新関係の成立――幕末維新期に於ける」(一、二)『史学雑誌』第四十四編第二、三号 (一九三三年二、三月)、戦後の藤村道生「明治維新外交の旧国際関係への対応――日清修好條規の成立をめぐって」『名古屋大学文学部研究論集XLI史学14』一九六六年、同「明治初年におけるアジア政策の修正と中国―日清修好条規草案の検討」同前誌XLIV史学15 (一九六七年)、坂野正高「同治年間の條約論議」『東洋文化』第五二号 (一九六七年三月―のち同著『近代中国外交史研究』(岩波書店、一九七〇年) 所収)、安井達彌「「日清修好條規」締結の外交過程」『学習院大学法学会　研究年報』12 (一九七七年) を参照。この間の、中国側の対日政策、日本観については、佐々木揚「同治年間における清朝官人の対日観について―日清修好條規締結にいたる時期を中心として―」『(佐賀大学教育学部) 研究論文集』第三一巻第二号 (一) (一九八四年) および苑書義『李鴻章伝』人民出版社、一九九一年、三三六―三四五頁、が有益である。外交交渉の過程それ自体は、小論の対象ではないが、これまでの研究で全くふれられることがなかった、名倉信敦・王仁伯や、ふれられることはあっても、その日本人との交渉については知られていなかった応宝時らの名を鍵とすることによって、この交渉過程の新しい面をうかがうことが出来ると思われる。

(76)『日本外交文書』第三巻 (一九三八年)、一八〇―一八一頁。

(77) 同前、一八六―一八七頁。

(78) 同前、一八七頁。

(79)「前掲」(注75) 田保橋「日支新関係の成立」(一) 三五―三六頁。

(80)「前掲」(注76) 一九六頁に収められている。

(81) ～ (84)『李文忠公全集』訳署函稿、巻一、三―四頁。論天津教案、同治九年九月初九日 (一八七〇年一〇月三日)、佐々木揚「前掲」(注75) 三二頁所引による。柳原らは日中提携による西洋列強との対抗という訴えを繰返し、また、それが

李鴻章の関心をひいたらしくこの後の上奏にも「柳原前光等来謂、毎稱西人強傴該国通商、心懐不服、而力難独抗、欲與中国通好以冀同心協力」（『籌辨夷務始末』同治朝、巻七九、四七―四八頁）とある。なお、『夷務始末』同治朝、巻七七、三五頁をも参照。

(85)『夷務始末』同治朝、巻七九、四八頁。
(86) 田保橋「前掲」（注75）「日支新関係の成立」（一）一八〇頁。
(87) 坂野「前掲」（注75）『近代中国外交史研究』二四七頁。
(88) 杉浦愛蔵「航海日記」「前掲」（注14）『杉浦譲全集』第二巻、四六頁。
(89) FZ1一三―一四、二〇―二一頁。
(90) FZ2五九三―五九五頁。なお、「唐人往来」の後、『世界国盡』刊行の少し前に「福沢諭吉閲　松田晉齋訳」として刊行された『清英交際始末』の「序」にも次のようにのべられていた。「粤（ここ）に清英の交りを稽ふるに、清人の耳目、其及ぶ所甚だ狭く、清人の轍迹、其至る所甚だ僅かにて、曽て英國の強富を知らず、猥りに之れを藐視（べうし）して勁敵とも思はず、自ら誇て華夏と云ひ、英を稱して夷戎と爲し、其動作却て反覆無信にして、輕（かろ）しく釁隙を開き、其開く毎に必ず敗を取り、遂に兵は益〻弱く國は益〻貧しく、萎靡不振の今日に至る。實に慨れむべし。抑〻其失錯を追思するに、小事は縷擧に暇あらず、其大に至ては、乃ち鴉片（あへん）の事あり、廣東の事あり、又天津と北京との事あり。之れに由て兩國の條約屢〻改まり、且清より償金を出せしことも一度ならざるなり」FZ2五三九頁。
(91) 巻二、亜細亜洲。
(92) 巻一、總論。
(93) 三宅雪嶺『同時代史』第一巻（岩波書店・一九四九年）二五九頁。
(94) 拙稿「さまざまな西洋見聞」「前掲」（注37）『西洋見聞集』六二二―六三四頁。
(95) 渋沢栄一「御巡国日録」「前掲」（注1）『渋沢栄一滞仏日記』三七三頁。
(96) 同前、三七五頁。
(97) 参照、拙稿「文明論における始造と独立」『福澤諭吉年鑑』10（一九八三年）一二五、一七五―一七六頁。
(98) 谷川徹三「解説」『和辻哲郎全集』第八巻（岩波書店・一九六二年）四一九頁。

(99)(103)(104)(105)「支那人の特性」『思想』一九二九年七月。『風土』初版に収められたこの部分は、表記を改めて『和辻哲郎全集』第八巻二四二頁以下に「付録」として収められている。また「支那人の特性」に先立って、和辻の「洋行」と中国経験との関係を最も早く示した文章として、帰国直後から書き始められた「国民性の考察（昭和三―四年）　〃風土〃　人間学的考察の第一稿」と題する講義ノートがある（国立国会図書館所蔵。このノートの閲覧については、山中逸洋氏の教示と援助をいただいた）。このノートには「東亜細亜に於て注目すべきNationは日本と支那と印度である」と書き出し、「支那については自分はただ上海香港の如き支那固有ならざる近代都市を見るに過ぎぬ。しかもなほ自分には支那のNationの印象は極めて鮮かであった。上海香港のみならず、シンガポア、ペナンの如き海峡植民地は、外形が洋風都市であるに拘らず、畢竟支那人の町である。支那の国家の権力はこれらの都市のいづれにも及んでゐないに拘はらず、これらの都市は支那のNationに属する」（傍線原文）以下中国・インド・日本の国民性を比較する一節がある。なおこのノートの總論と方法論の部分は、『和辻哲郎全集』別巻一（一九九二年）に抄録されており、これに付された米谷匡史氏の詳細な解説は、和辻の関心の形成過程と特質について示唆に富む。

(100)『風土』『和辻哲郎全集』第八巻、一三〇頁。

(101)和辻照編『故国の妻へ』（角川書店・一九六五年）三〇六頁。

(102)同前、三一二頁。

(106)「前掲（注100）、一二四頁。

(107)同前、一二九―一三〇頁。

(108)同前、一三三―一三四頁。

(109)『風土』への批判自体が、戸坂潤の「和辻博士・風土・日本」（一九七三年、『戸坂潤全集』第五巻、勁草書房・一九六七年に収録）からA・ベルクの*Le Sauvage et l'artifice―Les Japonais devant la nature*, Gallimard, 1986（篠田勝英訳『風土の日本』筑摩書房・一九八八年。なおベルク「和辻と環境決定論」『和辻哲郎全集・月報』8、岩波書店・一九八七年をも参照）にいたるまで必ずしも多くない。とりわけ小論の主題である中国理解にふれるものとしては、「モンスーンのアジア」（『思想』一九四〇年一〇月、のち『世界史における東洋社会』毎日新聞社・一九四八年に収められ、さらに『飯塚浩二著作集』第二巻、平凡社、一九七五年に収録）の前後から、アジアのモンスーン地帯について、風土決定論をこえる研究方法の開

発に努めて来た飯塚浩二の研究がおそらく唯一のそして内在的な批判といえよう。飯塚の一連の論文には、和辻哲郎の名や『風土』という名は登場しないが、『風土』のキイワードであった、モンスーン地帯特有の「受容的、忍従的」心性というとらえ方が、批判の対象として頻繁に現われる。一方、和辻の方でも飯塚の研究に注意していたらしいことが、『風土』改訂のあとがきからうかがわれる。また比較的近年の研究では、飯沼二郎『歴史のなかの風土』（日本評論社・一九七九年）第一章も、飯塚のそれに近い立場からの、『風土』の中国論に対する内在的批判である。

（一九九二・四・四）